

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2015
12

ISSN 1340-8917



特集 ■ 木を通じた人と地域の育成

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



1 巻頭エッセー／「過去」と「未来」が融合したハイブリッドな都市を目指して 熊谷俊人（千葉市長）

特集

木を通じた人と地域の育成

4	基調論文	木育による地域づくり、人づくり	浅田茂裕（埼玉大学教育学部教授）
8	北海道	木育マイスターを育成し、普及・啓発	阿部博美
10	山形県南陽市	全国初、木造の文化会館建設	安部史生
12	埼玉県秩父市	「生涯木育」で森林・林業の活性化を	前島香保
14	東京都檜原村	都市住民と森林をつなぐ会員制の森づくりプロジェクト	株式会社東京チェンソーズ
16	神奈川県横浜市	木に囲まれた環境の中で子どもを育てる	関山隆一
18	長野県塩尻市	病院や空港、大学の木質化	酒井久徳
20	岐阜県	木育で、地域の森づくり・人づくり	長沼慶拓
22	鳥取県	木のおもちゃとの触れ合いや木育スペースの整備	熊澤ゆかり
24	愛媛県伊予市	国産材をつかった玩具づくり	徳島忠久
26	宮崎県日南市	木のぬくもりを教育現場に	中條隆裕
28	沖縄県国頭村	県産材を使った森のおもちゃ美術館	大城 靖
30	副基調論文	赤ちゃんからはじめる生涯木育	NPO法人日本グッド・トイ委員会広報企画部

レギュラーレポート

- 34 平成 27 年度地方創生実践塾 徳島県神山町
移住者に選ばれる地域になるためには？ 西村佳哲
- 36 平成 27 年度地方創生実践塾 岐阜県美濃市
木育から「子どもを真ん中」においたまちづくりへ 松井勲尚
- 38 平成 27 年度地方創生フォーラム 島根県松江市
教育・移住をキーワードとした新たな地方創生
- 40 移住・交流推進支援事業 山梨県山梨市
田舎暮らしを地域で応援！ 原田 互
- 地域づくり団体探訪 石川県七尾市
- 42 小牧壮年団
「学生さん、一緒に祭りすっぞお！」

- 44 地域トピックス 静岡県焼津市
実寸大かつおのハガキで焼津をPR 新村 淳
- 45 首長の思い
環境と人にやさしいまち、春日井市
伊藤 太（春日井市長）
- 48 センター通信

グラビア

- 2 木を通じた人と地域の育成
- 46 都道府県漫遊 【新潟県】
- 47 手前みそですが… 【熊本県菊池市】



幸せの雪道

問い合わせ先 SENDAI 光のページエント実行委員会
(022・261・6515)
(写真提供 SENDAI 光のページエント実行委員会)

冬の仙台には、天の川が舞い降りる。SENDAI 光のページエントは、仙台市の定禅寺通をメイン会場として開催される、市民の手によるイルミネーションイベントです。定禅寺通のケヤキ並木は他県では類を見ないほど密集しており、この場所が光に包まれたとき、まさにページエント（野外劇）という言葉にふさわしい、幻想的な光の回廊が姿を現し、その美しさは「天の川が舞い降りてきたようだ」ともいわれます。

毎年12月上旬から31日まで開催される SENDAI 光のページエントは、例年250万人以上の人が訪れ、今では仙台の冬の風物詩として多くの方に親しまれています。

30回目を迎える今年のテーマは「未来へつなげる愛の光」。SENDAI ページエントを通じて、多くの方々に、家族への愛、恋人や大切な人への愛、地域への愛…など、様々な「愛」を感じていただければと思います。今年の開催は12月6日（日）から31日（木）までの26日間。点灯時間は17時30分から23時。（最終日のみ24時消灯）

表紙
光のページエント

「過去」と「未来」が融合した ハイブリッドな都市を目指して

千葉市長 ● 熊谷俊人



千葉市は千葉県のほぼ中央部にあり、東京、そして2つの国際空港からも程近く、また県内交通の要衝として発展し、現在、人口96万8千人の大都市となっています。都市の成長とともに市街化が進みましたが、一方で、緑豊かな田園、里山が残され、日本一の長さを誇る人工海浜の海辺を擁する、気候も温暖な、とても住みやすい「まち」です。

私たちは、この恵まれた千葉市を将来にわたり持続可能な都市、地域社会としていけるよう、様々な取り組みを進めていますが、ここではその中から2つをご紹介します。

キーワードは「過去」と「未来」です。

まずは「過去」から。

今をさかのぼること889年前、大治元年（1126年）6月1日に千葉常重が現在の市中心部に館を築き、本拠を移したのが「千葉」の始まりです。常重の子、「常胤」は、伊豆で挙兵後に敗北し房総半島に逃れた源頼朝を迎え入れ、兵を率いて鎌倉に入府させたエピソードで知られています。千葉氏はその後、鎌倉幕府の有力御家人として、東北から九州にかけて広大な所領を有していました。野馬追で有名な福島県相馬市をはじめ、各地に千葉氏一族が本拠を構えた都市があり、今でも千葉氏を郷土の歴史として大切にしています。

ところが、千葉市では、「常胤」という源平の物語の中でも重要なエピソードと関わる人物がいて、都市の成り立ちに関わった氏族と都市名が今も同じく続いているという珍しい状況があるにもかかわらず、そうしたことが市の中であまり知られていません。

千葉市にはほかに、世界最大級の貝塚「加曽利貝塚」や世界最古の花「オオガハス」、かつて保養地としての賑わいを見せた海辺など、さまざまな歴史・ルーツに関わる魅力的な地域資源があります。これらを今まで以上に大事にし、活用していけるよう、今、千葉市らしさの確立、「都市アイデンティティ」の確立に取り組んでいます。

次に、「未来」へ。

幕張メッセを中核に、未来型の国際業務都市の形成を目指して整備された幕張新都心が第二幕を迎えようとしています。

イオンモール幕張新都心が2年前に開業。今年5月には世界最速のモータースポーツと言われるレッドブル・エアレースの日本初開催。そして、2020年東京オリンピックでは、レスリング・フェンシング・テコンドーの3競技が幕張メッセを会場とすることとなり、国内外からさらに多くの方に幕張新都心を訪れてもらえる期待しています。

また、JRR京葉線沿いに、首都圏最大級となる住宅開発が行われ、1万人以上が住む新たな街が誕生する予定です。様々な動きがまさに今、幕張新都心を舞台に、動き始めようとしているのです。我々も、これらの動きを相互に連携させ、幕張新都心全体の魅力を底上げすべく、ドローンや先端技術を活用したモビリティの導入などを内容とする国家戦略特区に係る提案を行ったところです。

これからも幕張新都心を「未来型都市」として成長、発展させるべく、先駆的な街づくりを積極的に進めて参ります。

今、地方創生の取り組みの中で、日本中で「人口ビジョン」「総合戦略」を策定、推進しようとしています。千葉市も来年3月の策定に向け、検討を進めています。比較的恵まれているとされる本市であっても、非常に厳しい将来イメージが浮かび上がってきます。

しかしながら、我々はこれを手をこまねいて見ているわけにはいきません。我々の都市を、我々の地域社会を、良好なものとして子どもたちの代に、さらにそのまた子どもたちの代へと引き継いでいく義務があります。

そのためには、自分たちを見つめ直し、また未来を見据えながら、その中に見出された資源を適切に活用していくため、市民や企業など、こうした想いを同じくする全ての皆さんと手を携えてまいります。

木を通じた人と地域の育成



文化会館内交流ラウンジ。正面入口より木の香る樹林を印象させる8本柱

● 山形県南陽市 (p10-11)



平成23年度に始まり、今年で5回目を迎えた「木育フェア in アリオ札幌」の様子。北海道と(株)セブン・イレブン・ジャパン及び(株)イトーヨーカ堂との「包括連携協定」により実施

● 北海道 (p 8 - 9)



ツリークライミング

● 東京都檜原村 (p14-15)



秩父の森のおもちゃ美術館

● 埼玉県秩父市 (p12-13)



箸づくりの様子

● 長野県塩尻市 (p18-19)



森のようちえん活動の様子…木登り
● 神奈川県横浜市の(16・17)



とっとり赤ちゃん木と森の広場を利用する子どもたち

● 鳥取県 (p22-23)



「ぎふの木のおもちゃ」による乳幼児期からの木との触れ合い

● 岐阜県 (p20-21)



積み木で遊ぶ児童。二人分の積み木を合わせ、大きな三角形を作っている

● 宮崎県日南市 (p26-27)



親子木工体験風景

● 愛媛県伊予市 (p24-25)



沖縄本島最高峰、与那覇岳の森林

● 沖縄県国頭村 (p28-29)

木育による地域づくり、人づくり

―産業と結びついて展開、住民生活の向上も―

木育はなぜ生まれたか

四方を海に囲まれ、南北に長く、標高差の大きい日本の国土には、亜熱帯から亜寒帯に至るさまざまな気候帯が存在している。この特異な環境と湿潤な気候は、国土の67%を占める豊かな森林を形成し、そこで暮らすヒトにさまざまな恵みを育みもたらしてきた。法隆寺、東大寺などの木造建築物に代表されるように、日本人が世界に誇る木の文化、伝統は、日本の多様な森林によって生みだされてきた。

その日本において、ここ数年注目されているのが木育である。平成16年に北海道から始まった木育は、日本人の暮らしの中に「木」を取り戻すことをその狙いとし、「子どもをはじめとするすべての人が『木と触れ合い、木に学び、木と生きる』

取り組み」とされた。平成19年からは、林野庁を中心に木育活動が推進されるようになり、「幼児期から木との関わりを深め、豊かな暮らしづくり、社会づくり、森づくりに貢献できる市民の育成を目指す活動」（木育推進体制整備総合委員会）として様々な展開するようになってきた。

木育の「木」には、樹木と木材の2つの意味がある。いずれの木も、日本人、あるいは日本社会、日本文化の形成に欠かせないものであった。しかし、現在の日本人の暮らしからは木が感じられない。ある幼稚園での取り組みで、家庭にある木製品を持ってくるよう園児たちに指示を出したところ、当日集まったものの2割ほどは、木目が描かれたプラスチック製品であった。全国の小学生、中学生、大学生に対して行った調査では、現在の日本の森林面積が30年前に比べて50%以下に減っていると考える児童・生徒が9割を超えていた（実

際の森林面積は、約2500万㏎で30年前とほぼ変わらない）。

子どもはもちろん、その親の世代も含めて、日本人が木との関わりを失いつつあるこの現状は、戦後復興期の木材不足、森林荒廃、安価なプラスチック製品や新素材の普及、エネルギー源として

埼玉大学教育学部教授 ● 浅田 茂裕

筆者プロフィール

浅田 茂裕 氏
(あさだ・しげひろ)

1966年熊本県生まれ。農学博士。専門は木材工学、技術教育学。鹿児島大学卒業後、九州大学大学院を経て、埼玉大学教育学部に着任。木育推進委員会委員、木育推進アドバイザーなどを務める。NPO法人木づかい子育てネットワーク理事長。

木質化された学校、施設の快適性評価について研究を進めるほか、各地で木育活動の実践にあたる。



東京おもちゃ美術館赤ちゃん木育ひろば

の薪炭の利用減少、度重なる自然災害へ不安など、様々な要因が生み出したものである。加えて、海外からの木材輸入自由化は、日本の林業経営に大きな打撃を与え、限界集落や消滅可能性自治体など、日本の森林面積の約6割を抱える山村地域の問題の遠因となった。日本人が森林、木材から離れる契機は、このように積み重ねられていった。

そして全国に木育が広がった

日本人のこうした問題意識をもっとも早くから感じ、木育の推進に積極的であったのは、どちら

かといえ森林や木材と縁遠い都市部であった。地球温暖化などの環境問題、LOHAS (Life styles of Health and Sustainability) などの健康志向のライフスタイルへの関心の高まりは、森林や木材との触れ合いに対する関心をもたらし、とりわけ、子育て層や幼児教育機関、NPOなどは、木育に積極的関心を示した。結果的に、山村地域(林業地域)よりも都市部を中心に木育の推進が広がっていった。その中心的役割を担ったのは、平成22年度より林野庁の補助事業を受託したNPO法人日本グッド・トイ委員会である。

東京おもちゃ美術館を運営するこのNPO法人は木育推進の拠点として積極的な事業展開を行っている。その中心は木のおもちゃであり、「赤ちゃん木育ひろば」の設置や移動おもちゃ美術館「グッドトイキャラバン」「木育キャラバン」の実施など、幅広く木育に取り組んでいる。いずれの事業も統一されたパッケージとデザイン性に優れたおもちゃによって構成され、子育て層に支持されている。

そして、木育を全国に広げる重要な事業が、日本グッド・トイ委員会によって始められた「ウッドスタート事業」である。この事業は、新宿区と提携して、新生児誕生世帯に対して同区から木のおもちゃを贈答する試みである。この事業で特筆すべきは、木のおもちゃをカーボンオフセット事業(二酸化炭素などの温室効果ガスを削減しようという活動)で提携していた長野県伊那市の木材と木材加工業を活用したことにある。つまり、都

市部と山村地域とを経済的に、そして持続可能な関係として結びつけたのである。

このウッドスタート事業を契機に、山村地域における木育が、産業と結びつきながら展開するようになってきた。その成果の一つは、木のおもちゃ、家具、食器などの見本市である「森のめぐみの子ども博」だ。毎年内容が充実し、現在では2日間で5千人以上の来場者を数えるほどまで拡大した。これを支えるのは岐阜県、長野県、栃木県、宮崎県、青森県など全国各地の生産者である。

木育とは何か―教育活動と経済活動―

全国各地に広がる契機として、日本グッド・トイ委員会の例を取り上げたが、それ以外にもさまざまな木育が推進されてきた。例えば北海道では、地域の森林、木材、そして人材を生かした取り組みとして、グリーンウッドワークの推進や木育マイスター養成講座の実施など独自の発展を続けている。岐阜県では早くから木育推進員制度を導入しているほか、ぎふ木育30年ビジョンの策定、東京おもちゃ美術館との連携など、多様な活動に取り組んでいる。熊本県では、熊本大学を中心に木育推進員養成講座が開催され、木育を支える人材の養成が継続的に進められている。筆者の居住する埼玉県では、埼玉県産材で製作した木のおもちゃを幼稚園に贈答する事業(ウッドスタート事業)を進めたほか、木育推進員による幼稚園訪問や「まちの木育スペース Woods ON」の設置などの取り組みが進められている。

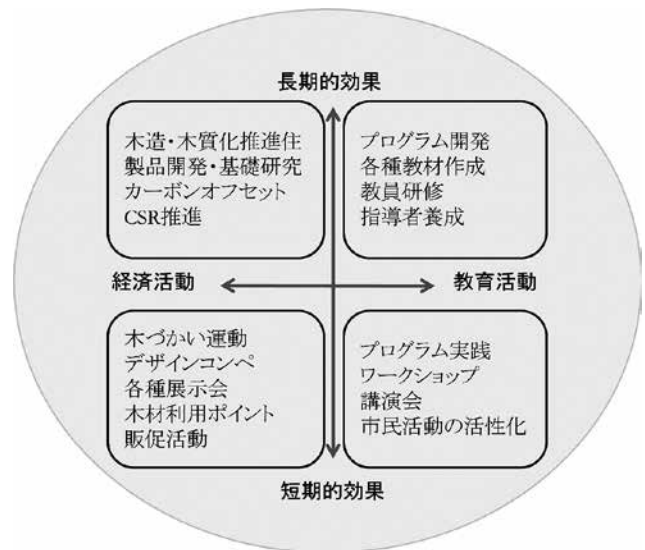


図 木育活動の分類と役割

講座やワークショップ等の短期的、一過性の取り組みを含めて、さまざまなチャネルを利用した学習の機会を増加させていく必要がある。

教育活動の一方で、木育に期待されているのは、木材利用推進についての具体的成果である。いわば経済活動である。木材利用は、木材の持つ生理的親和性（あたたかみや肌触りのよさ）、環境的親和性（炭素貯蔵機能、易廃棄性など）を生かし、家庭、地域、社会を木質化していくことにより、人間性の回復そして林業の活性化を目指す公益性をもった活動である。木のおもちゃや木材を使ったものづくり活動が子どもの育成に大きく関わり、意味のあるものであるとすれば、木に囲まれた環境での学び、育ちを支えることは、長期的な視点で見れば木育活動として重要である。製品化や森づくりを企業のCSR活動（企業が社会に与える影響に責任を持つ）として導入することなども木育といえよう。

教育としての木育が、木材利用＝環境破壊という単純な構図を修正し、市民の知識理解を育むものであるとすれば、経済活動としての木育は、木材利用を推進し、適切に管理された持続的な森林を育成するとともに、林業経営、地域経済の活性化に資するマーケティングの役割を担う。前者は教育機関や個人、市民レベルで進められ、後者は自治体、企業等の積極的な関与によって実現する。二つの木育の適切な実施と連携は、森林資源を使うことへの誤解をとき、さらに使いたいと思う心情を育てる。そのことが、地球環境、森林、山村の環境を改善する。あらためてこのように考えて

いくと、木育は、持続可能な社会の実現に向けて大きな可能性を持っていることに気づかされる。

地域づくりと木育

最近、山村地域の自治体や組織が木育に大きな関心を寄せ始めている。筆者が実際に取材したいくつかの自治体を例として紹介する。

長野県塩尻市では、内閣府が支援する地域再生計画の1つである「信州F・POWERプロジェクト」を推進、豊富な森林資源を生かした循環型社会の構築を目指しており、発電、熱利用を計画している。その一環として、木育は地域経済の柱としての森林についての理解と共生を目指す取り組みとして様々な事業導入が進む。

東京都檜原村では、前出のNPO法人日本グッド・トイ委員会と連携し、ウッドスタート事業を導入するとともに、林業地域としての特性をいかした産業振興として、檜原ブランドの木のおもちゃ、遊具開発、人材育成および観光地化を目指す「檜原村おもちゃヴィレッジ構想」を掲げている。

埼玉県秩父市では、檜原村同様にウッドスタート事業を導入し、地域材を生かしたおもちゃ生産を地域の企業、人材によって進めている。また秩父市と東京都内、埼玉県内の都市部を結ぶ西武鉄道との連携など産官学連携によって、秩父エリア以外からの観光客誘致や、地域産業の活性化を目指している。

こうした木育の取り組みは、山村地域にとって二つの意味を持っている。一つは、木育を中心と

いずれの地域でも、その地域の課題や林業、木産業の現状との関係で様々な木育が推進されていることがわかる。こうした活動をまとめてみると、木育はもはや教育活動の範疇に収まらないことに気づく。

教育としての木育は、学校教育そして生涯学習体系として位置づけられるものである。その責任の主体は学校の教員はもちろん、社会教育施設やNPO等の市民団体が担う。森林や木材利用について正しく認識し、適切な管理を進めることのできる市民の育成は喫緊の課題であり、学校教育のような長期的視点に立った木育だけでなく、市民

した魅力ある地域づくりである。地域資源を活用し、人的交流、経済活動を活性化する上で、木育というテーマは、地域ブランドの向上に貢献している。他方、木育は、地域住民のQOL（Quality of Life）の向上にも貢献する。安全、安心な子育て環境、質の高い教育環境、社会環境の整備は、地域の担い手を育てる基礎を築く。例えば岡山県西栗倉村では、「百年の森構想」を中心とした移住政策を掲げ、イターン、Uターン希望者を積極的に受け入れその支援を進めてきた。ここでの木育は、観光誘致や産業振興以上に、住民向けの子育て支援の方策として注目され、地域の内的充実の手段として検討されはじめている。

埼玉大学木材研究室が進める木育

こうした木育の充実について各種調査や情報収集を進める傍ら、埼玉大学木材研究室では、新しい木育活動の推進に向けて、様々な取り組みを進めてきた。

学校教育に関しては、木育のテキストづくりや教材づくりがある。学校教育に関して言えば、木育の知名度は極めて低い。食育が小学校、中学校における学習指導要領で取り上げられているのとは比較にならない。文部科学省が管轄する「〇〇育」（例えば国語教育、情報教育など）は、300を超えるという。こうした中で、後発の木育が入り込む余地は極めて少ない。また多忙な学校の中で新たなものを導入することにはかなりの

抵抗がある。そこで既存教科や活動に連動可能なプログラム開発を進めてきた。とくに、多くの小学校が取り組む「林間学校」での宿泊学習や、社会科の環境保全の学習に取り込めないか検討している。その他、幼稚園教育や特別支援学校におけるものづくり体験や環境整備、学童保育でのプログラム改善についても取り組みを進めている。いずれも地域や学校独自の体験学習として取り組むたいという要望は高い。

経済活動としての木育では、自動車メーカーの展示場におけるキッズスペースの木質化を図った。異業種間のマッチング、地域材の利用、地域コミュニティに対する企業スペースの開放などさ



浦和駅前に開設した子育て支援施設

まざまな意義を持つと考えられる。同様に、子育て支援施設、スキー場、飛行場、病院の小児病棟の遊びスペース、イベントブースなどについても木質化を実施している。こうした試行が、当該の施設、そして地域、利用する住民の共通の価値として存在しうるか、あるいは存在しうるために必要な要件について検討していくことが、今後極めて重要となると考えている。

木育が目指す未来

現在、森林とその恵みについて学ぶ木育は、市民団体、NPO法人、学校、自治体、そして企業など幅広いアクターのゆるやかな連帯と協働によって進められている。当初筆者は、子どもから大人まで日本人の木への愛情を呼び覚まし、木を使う人の文化や伝統取り戻すことが木育であり、極めて限定的に教育活動の一つと捉えていた。しかし現在では、木育が教育にとどまらず、木材利用推進や環境形成、社会形成等多様な目的を持った取り組みとしていきいきと機能し始めている。木育が目指す社会は、森林の多面的機能や木材の持続的利用を実現し、豊かで、安心できる地域づくりとその担い手づくりである。

木育の現在について簡単に紹介したが、十分に説明できておらず、栃木、宮崎、沖縄など、先進的な事例を持つ地域まで示せなかったことは残念であるが、今後の取り組みの参考にしていただければ幸いである。

木育マイスターを育成し、普及・啓発 ―北海道で生まれた「木育」―

北海道森林活用課木育推進グループ 主査・阿部 博美

「木育」とは

「木育」は、平成16年3月に北海道で生まれた言葉です。子どもをはじめとするすべての人が「木とふれあい、木に学び、木と生きる」取り組みで、子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と、木や森とのかかわりを主体的に考える豊かな心を育むことです。

平成16年度に、公募の中から選定されたテーマについて、検討から提言、実施までを、道民、市町村職員、道職員で構成されたプロジェクトチームで行う「協働型政策検討システム推進事業」の検討テーマに、「子どもの頃から木を使うことで森林と環境を考える心を育てる『木育』の推進」が選ばれました。これを受け、官民協働のプロジェクトチーム「木育推進プロジェクト」を立ち上げ、木育の推進について検討。平成17年3月に報告書「木育（もくいく）―木とふれあい、木に学び、木と生きる―」として理念や推進方法が取

りまとめられました。

木育推進事業

北海道では、平成17年度から木育推進のための様々な取り組みを行っています。「子ども未来の森林づくり推進事業」として「わくわく！木育ランド」（子どもたち向けの「木の遊園地」）やワークショップ（大人向けの学習会的な講演会）の開催、「赤ちゃん誕生記念植樹」（乳幼児期から森林とふれ、親しむ機会をつくりだします）の実施、道内全市町村に「げんきの森」（森遊びの達人など、地域の大人たちと一緒に体験活動を行います）を設定してきました。

また、「『木育』地域活動ネットワーク支援事業」として、地域における「木育」活動の実施のほか、「学校での木育推進事業」として、教材の開発、モデル授業、普及啓発パンフレットの作成などを実施しました。

さらに、プロジェクトチームのメンバー有志を



木育マイスター育成研修の一コマ（木育教材「木育の玉手箱」を使用）

中心とした任意団体「木育ファミリー」が発足。ホームページやメールマガジン「わくわく！木育通信」、パンフレット等による普及PR活動も実施してきました。

平成21年度には「まちじゅう木育プロジェクト推進事業」として、木育遊具等普及システム検討会議（全6回）を開催。木育遊具等モニタリング調査の実施、木育遊具パッケージシステム（ホームページ上で紹介し、現在も希望者に配布しています）の作成を行いました。

木育マイスターを育成

平成21年度にテキスト「木育達人（マイスター）入門」を作成し、平成22年度より「木育」の理念を十分に理解し、民間における「木育」活動の企画立案や全体的なコーディネートができ、地域に



「木育ひろば in チ・カ・ホ」の様子（札幌駅前通地下歩行空間イベントスペースにて開催）



木育マイスターによる木育活動「木育バスツアー」の様子

において指導的な役割を果たすことができる人材を育成する「木育マイスター育成研修」を実施しています。

木育マイスター育成研修のカリキュラムは第1章「木育の理念」、第2章「木にふれ、木につい



「木育 next10」（平成26年10月・木育絵馬を囲んで）

◎ホームページ「北海道の木育」
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sr/sky/mokuiku/index.htm>

て学ぶ」、第3章「木と生きる暮らしと産業」、第4章「木と生きる人の成長と木の関係」、第5章「木育プログラムの伝え方」、第6章「木育プログラムのつくり方」の全6章に分かれており、これらすべてのカリキュラムと実地研修を修了すると、「木育マイスター」として北海道知事に認定されます。

平成26年度までに153人の様々な経歴や職種を持つ「木育マイスター」が誕生。「木育活動普及促進事業」や「木育の産業化等に向けた支援」などにより、「木育マイスター」が中心となって、民間企業（団体）等と協働で様々な木育活動を実施し、全道各地で活躍しています。

また、これから木育活動を進めていく方々に向けて、これまでに育った「木育マイスター」によ

る木育活動を事例集として取りまとめ、ホームページ上で公開しています。

「木育 next10」の開催

平成26年度、「木育」は10周年を迎え、これまでの木育の取り組みを振り返り、木育の新たなビジョンづくりのために「木育 next10」を開催しました。

全道各地で木育活動をしている人の木育に寄せる想いや木育宣言を絵馬に書いていただく「木育絵馬プロジェクト」も同時に実施。当日、参加者の手で平成16年の台風18号で倒れた北大ポプラ並木の板で作った絵馬が吊されました（現在はむかわ町穂別の「むかわ木育の学校」にて保管）。

「木育の今」に目を向け、官民協働で行ってきた「木育の推進」を未来へつなげる方向性をさぐり、目標を新たに次の10年に向かって歩き始めることを宣言して閉会しました。

まだ低い、「木育」の認知度

北海道における「木育」の認知度はまだ低く、木育マイスター、民間企業（団体）、市町村、地域住民、そして北海道が協働で「木育活動」を続けていく必要があると考えております。

「木育」が道民に定着するまでには、なお時間がかかると思われますが、息の長い道民運動として「木育」が地域に定着していくよう、北海道としても、民間企業（団体）への働きかけや情報提供を行うなどして、普及に努めてまいります。

全国初、木造の文化会館建設 —森林資源の活用、循環型社会の構築へ—



南陽市文化会館 主幹 ● 安部 史生

地元の森林資源

戦後の日本では、国の「拡大造林政策」のもと、膨大な需要を満たすため人工林の造林が行われました。それから50年以上経過して、木材としての



文化会館外観（手前：低層部ラウンジ棟、奥：高層部ホール棟、後方：設備棟）

適齢期を迎えた森林は、その多くが有効利用されず森の高齢化、荒廃化が進んでいる状況にあります。これら先人の方々が育てた森林（人工林）は、適度な伐採を行うことで健全な森林機能を再生、回復できるものであり、人の手による管理が欠かせません。今、この貴重な資産である森林資源を地域資源として有効に活用する施策、循環型の社会システムの構築が求められています。

南陽市では、総面積1万6070㏎のうち北部を中心に約6割を森林が占め、その内約4割の2947㏎が人工林です。本市でも森林の荒廃が進んでおり、多面的機能の低下による倒木、水害地滑りなどの被害が発生している状況でした。

木造化への背景

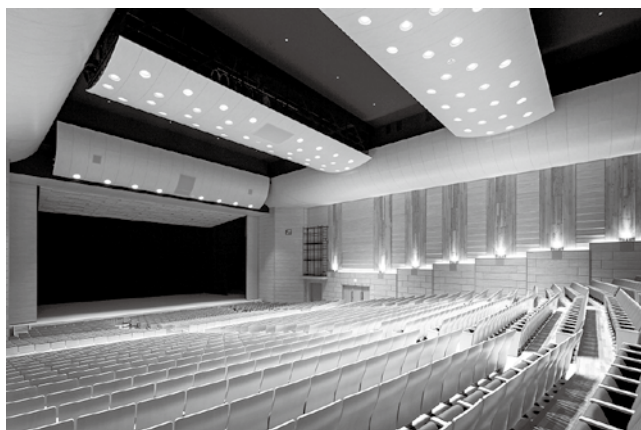
本市においては、平成20年より本市にゆかりの企業にご支援をいただきながら森づくりを行う「企業の森整備事業」を立ち上げ、これまで市内6カ所、面積127㏎において実施してきました。

国の公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律の施行を受け、市では、平成23年に公共建築物等における木材の利用促進に関する基本方針を策定し、木材の需要拡大に効果の高い諸施策の推進に努めてきました。同年には、市内吉野地区に「吉野森林交流センター」を整備し、この方針に基づき地元産材を積極的に採用、木材使用量の84%に達する158立方メートルの南陽市産杉材を使用する実績を作りました。

全国初となる 大型耐火木造の文化会館

平成23年、本市の第5次総合計画の重要施策に位置付けている文化会館の整備検討に着手。平成24年度から26年度の3年かけて、総事業費66億円を投じ、「全国初となる大型耐火木造の文化会館」として、延床面積5900平方メートルの木造一部RC造、地上3階地下1階の本館の整備を進めました。地産地消の木材利用による市内への経済波及効果、雇用創出等にも配慮したものです。

文化会館は、不特定多数の方が集う集会施設のため耐火建築物としなければなりません。よって、使用する柱等の部材には耐火性能を有するものが必要となり、加えて大ホールの長スパンを支える十分な強度が求められました。本市では、これらの条件を満たす技術を持った県内企業があり、国内最先端の耐火木造技術を取り入れた集成材を採用することとしました。この集成材は、市内の人工林の多くを占めるスギ材を原料として作ることができるものであり、木材の弱点を補い、十分な強度の建築が実現できました。



文化会館大ホール内。木で覆われた空間、一部に可動席を配置



文化会館内木質ボイラー。乾燥チップを燃料に540kwの冷暖能力

木材調達を地元米沢地方森林組合へ発注し、市内13カ所25鈴より丸太伐採量の47%にのぼる5714立方メートルの杉材を供給しました。木構造材製作加工では、集成材の実績のある県内業者(株)シエルトに発注し、東北地域を巻き込んだ体制で集成材量3570立方メートルを生産しました。建設現場では、大手ゼネコンと地元業者のJ・Vが請け負い、最先端の木造技術を手掛けることができました。この事業により、森からの新たなカタチ、流れが出来上がり、地元の木で地元の建築をつくる目標は達成できたと思っています。また、木材調達、加工、建設の各工事を分離し、できる限り地元で還元できる発注としたことで、地元雇用及び直接的、間接的な経済効果を生むことができました。

一方、木材のエネルギーとしての可能性にも着

目しており、文化会館には、木質バイオマスボイラーを導入し、木材を木質チップに加工し燃料として使用することで、その熱エネルギーを施設の冷暖房に活用することとしています。併せて、雪国の気候に考慮した太陽光発電設備も導入し、環境負荷の少ない省エネルギー施設のモデルとなるものと期待しています。

◆◆◆ 会館内に「木育ひろば」も

文化会館は、「多様な交流を促す市民のための芸術文化の創造拠点」として、二つのホールと創作支援諸室を備え、南山形圏域の方々が広く訪れることにより新たな文化、交流が生まれる空間を目指しています。

大ホールは、最大1403人の大型公演が誘致できる。耐火木

造の特性を最大限に活かして、美しい響きと木の温もりが調和する心和む空間となるよう「静けさと響きの良い空間」をコンセプトに設計しました。プロセニウム形式の舞台は、幅22メートル、奥行14メートル、高さ10メートルとなり、

様々な演目が可能となります。

創作支援諸室には、多目的に活用できる小ホール(約500人収容の平土間のホール)や「展示ギャラリー」等を配置し、利用者が気軽に活動の発表や作品の展示等を行うことができる空間としています。

また、子ども達が木に触れ、木で遊ぶ「木育ひろば」を施設内に設け、子育て世代の方々が気軽に親子で訪れ、五感で木を楽しみ、自然に木に対する親しみや興味をもってもらい木材の良さを学ぶ場として開放しています。さらには、各諸室では、世代を超えての体験や創造、発表、交流の輪が生まれるなど、本市の未来に向けた可能性が広がっています。

◆◆◆ 夢はぐくむ芸術文化都市を目指して

今回の森づくりから始まった文化会館整備の取り組みが、単に建設整備による一時的な経済波及効果に留まらず、里山の活性化、森林の多面的機能の回復及び林業再生、木材利用促進、また赤湯温泉等への交流人口の拡大、地域経済の活性化を導くことで、人づくり、まちづくり、さらには、魅力あふれる地域ブランドの形成といった二次、三次波及の効果につながっていくものと期待しています。

また、この文化会館を、市民憲章に掲げる「かおり高い文化のまち」の核として、地域の人々が輝き、まちが輝き、新たな文化を生み出す活力に満ちた「夢はぐくむ芸術文化都市」を目指しています。

「生涯木育」で森林・林業の活性化を —誕生祝い品に木のおもちゃ、林業支援のサポーターを全国に—



秩父市森づくり課 主査 ● 前島 香保

秩父市は、東京・池袋から特急で1時間20分というアクセスの良さにも関わらず、市域の87%が森林という自然環境に恵まれた地域です。市内の森林・林業を取り巻く状況は、拡大造林で植えられたスギやヒノキの人工林が、資源として本格的な利用可能な段階となっている一方で、木材需要の低迷、価格の下落、採算性の悪化、後継者不足などの林業が抱える諸問題に直面しています。

そこで、これまで実施してきた、秩父産材を使っ

て、森林・林業や地域材について、住民の意識に訴える事業を展開することにより、消費者側のマインドを変えることが森林・林業の活性化に繋がると考えて、特に「森や木の良さを感じてもらおう」活動を積極的に支援、実施することにしました。秩父市の「木育」の原点はここにありま

◆◆◆ 木育キャラバンの開催と ウッドスタート宣言

秩父市では、市単独で林業振興に取り組むだけではなく、定住自立圏構想に基づき、近隣自治体や国、県、林業関係団体と「秩父地域森林林業活性化協議会」を平成24年5月に設立しました。

同協議会の支援事業の一つとして実施されたのが、秩父の木工作家を中心に結成された任意団体

「秩父もくもくきかく」と、東京おもちゃ美術館を運営し、全国に木育キャラバンを展開する「NPO法人日本グッド・トイ委員会」が主催した「秩父の森のおもちゃ美術館」でした（平成26年11月開催）。

世界中のおもちゃのほか、秩父産材や秩父銘仙などの地元の材料を使い、秩父の作り手によって製作されたおもちゃが大集合する地域色豊かな内容で、地域内外から多くの方に御来場いただき、会場には子どもたちの笑顔があふれていました。

来場者からは、「木に触れて落ち着いた心持ちになった」「木育は子どもだけでなく高齢者にも良いと思った」など、「木」や「木育」への関心や期待の高さがうかがえるコメントを多くいただき、「木育」が森林・林業分野に大きく貢献することを確信しました。

そこで秩父市では、これまでの取り組みに「木育」を加えて、更なる森林・林業の活性化を推進するため、県内初となる「ウッドスタート宣言」を行い、平成27年度から木育事業を本格的にスタートさせました。

ウッドスタート宣言に先立ち開かれた「秩父市木育円卓会議」では、市内のみならず、秩父が源流である荒川でつながるさいたま市や、姉妹都市である荒川区などから、森林、林業や子育てなどに携わる方々が一堂に会し、地域や分野を超えて「木育を知る」をテーマに、「木育」の全国的な動きや今後の可能性について意見交換しました。

◆◆◆ 「生涯木育」の事業展開



ウッドスタート宣言調印式

市はこれまでに、地域産木材の利用促進、林業従事者の増加等、業界全体の活性化に向けての新たな仕組みづくりを模索してきました。しかし、コストや



秩父市木づかいサポーターズのチラシ



秩父の森のおもちゃ美術館

「木育」というと、子どもに焦点が当てられがちですが、秩父市が取り組む「木育」は、市の豊富な森林資源を活用して、一生を通し様々なライフステージで森林・林業について学び、触れ、自然に「ちちぶの木」のファンになるような、「生涯木育」を目指すものであり、森林・林業の活性化と地域材の利用促進を推進するという点に特徴があります。

○ウッドスタート（誕生祝い品）事業

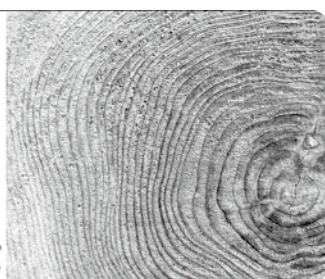
秩父産材を使用し、秩父の木工職人が製作する『木のおもちゃ』を誕生祝い品として配布する「ウッドスタート（誕生祝い品）事業」は、今年

度から実施しています。

誕生祝い品となる木のおもちゃのデザインを公募したところ、全国から22点の応募があり、NPO法人日本グッド・トイ委員会の監修のもと行われたデザイン審査の結果、スギ、ヒノキを使った積み木「TUMICCO（つみっこ）」が最優秀賞に選ばれました。「TUMICCO」の配布は、平成28年1月の10カ月児健康診査から開始する予定です。木のおもちゃという初めての木との出会いの中で、「木育」を親子でスタートするとともに、木工産業が新たな産業として育っていけばと考えています。

○木づかいサポーターズ事業

関東に位置する秩父市でも、高校や大学等への進学や就職する段階になると、多くの若者が都心部へ移住します。また、結婚や転勤等で秩父を離れざるをえないこともあります。そこで、秩父市では、ふるさとの山や森を大切に思ってください方に、秩父市の森林・林業活性化の取り組みの支援者になっていただく「秩父市木づかいサポーターズ」事業に取り組んでいます。



ちちぶの木づかいカード

サポーターには、会員証として、全国約3千のサイモンズカード加盟店（ネット加盟店を含む）で使えるポイントカード「ちちぶの木づか

いカード」（入会金、年会費無料）を発行します。貯めたポイントは、1ポイント＝1円で買い物等に利用でき、期限切れになったポイントは、秩父市に寄附され、秩父市の森林・林業の保全、活性化事業に活用されます。いつでも、どこにいても、気軽に、ふるさと秩父の山や森を元気にする応援ができる仕組みです。

このほか、秩父の森林・林業をわかりやすく紹介したパネルを作成し、イベント出展その他各所での展示や説明、市内の小中学校等への出前授業の検討、秩父の森林の間伐を手伝い、間伐材を薪として販売するボランティア団体「秩父森づくりの会」の運営等も、「生涯木育」事業の一環として実施しています。

「木育」は地域や世代をつなげる

秩父市での「木育」の取り組みは、スタートしたばかりですが、「木育」には、地域や世代、産業をつなげる力があると感じています。

姉妹都市である豊島区の「ゆりかごとしま事業（誕生祝い品）」で、お祝い品のラインナップに秩父産のヒノキ材を使用した木のおもちゃが取り入れられたことや、秩父市の誕生祝い品「TUMICCO」が秩父銘仙（織物産業）とのコラボレーションで製作されることは、その代表例と言えるでしょう。

上下流域の交流や連携、親子の絆、新たな産業の創設、他産業とのコラボレーションなど、まだまだ大きな可能性を秘めた「木育」とともに、更なる森林・林業の活性化に取り組んでまいります。

都市住民と森林をつなぐ会員制の森づくりプロジェクト —お客様の顔が見える林業を—

株式会社東京チェンソーズ

東京チェンソーズ設立の経緯

私どものホームタウンは東京の西の果て、西多摩郡檜原村です。檜原村は総面積の93%が林野という山村で、人口は2300人あまり。東京都では島しょ部をのぞく唯一の村で、その大半が秩父



檜原村での間伐の様子

多摩甲斐国立公園に含まれています。

とはいえ、都心からも実はそれほど遠いわけではなく、たとえば新宿からなら高速で1時間半あれば着いてしまう、そんなところです。

2006年7月、東京チェンソーズはこの村で創業しました。当初のメンバー4人は、いずれも東京都森林組合に所属していたので、そこからの独立という形になりました。当時、森林組合は現場作業班の外注化を進めていたときでしたので、タイミングは良かったようです。

独立の動機はいくつかありますが、一番大きかったのは「自分たちがやりたい林業をやる」でした。

「やりたい林業」とは何か？一言でいえば、「お客様の顔が見える林業」です。発注者の依頼に応じて、その人が喜んでくれる仕事をしたいと思ったのです。ほかの多くの仕事ではそれは当たり前前のことかもしれませんが、林業ではそうでもありません。発注者には1度も会うことなく、山の中の現場で作業が始まり、そして終わる。そういう

流れが一般的でした。

しかし、これではおもしろくない、お客様の意向に沿って、相談しながら山づくりをしたいと私たちは思ったのです。

また、木の使い道として魅力あるものを常に探してもいいです。そのためには広く情報を得ること、そして、情報を得るためには発信することも重要と考え、自社ホームページの充実や各種媒体へ出ることを積極的に行っています。

会員制森づくりプロジェクトや山仕事体験

独立当初は古巣である森林組合の下請けが業務のほとんどを占めていました。創立から4年ほど過ぎて下請けから脱却。現在は森林整備を中心にしつつ、「お客様の顔が見える林業」を実現すべく東京美林倶楽部の運営やその他イベントの開催など、広く事業を進めています。

○森林整備

会社の売り上げとしても大きなウエイトを占めているのが森林整備。林業の現場の仕事です。現状では、東京都が発注する事業が大半を占めています。

仕事の年間の流れは、春は植栽、夏は下刈り、秋から冬にかけて間伐・枝打ちという従来の林業のサイクルに合ったものになっています。

植栽は10年ほど前まではほぼゼロだったのですが、ここ最近、ふたたび増えてきました。戦後、植林した山で伐採・搬出したのち、花粉の少ないスギやヒノキに植え替えています。下刈りは、そうして新植された山での草刈りです。6月下旬か



東京チェーンソーズのメンバー

ら始めて9月いっぱいまでがシーズンとなります。その後、間伐・枝打ちが始まります。都の仕事とは別に2014年に取得した山林での、作業道敷設、伐採・搬出も行っています。ここから搬出した木は東京・多摩地区の工務店、設計事務所、製材所、林業従事者などからなる「TOKYWOOD普及協会」がつくる住宅へと繋がっていきます。

○東京美林倶楽部

東京に美しい森林をつくる会員制のプロジェクトで、2014年11月から運営を開始しました。プロジェクトは会員が1人3本の苗木（花粉の少ないスギ、ヒノキ）を檜原村の山林に植えることからスタートします。会員は契約期間の30年のなかで、下草刈りや枝打ち、間伐といった森林育

成を体験するとともに、森の恵みや檜原村を満喫できる各種アクティビティ、ワークショップに参加することが出来ます。25年目以降2回行う間伐では、間伐材で家具や玩具など希望するものに加工することもできます。残った1本は、次世代へつづく美しい森林へとなっています。

入会金は1口5万円、年会費は1000円と設定しました。会員期間は30年。これは1本の木の健全な成長にとって、最も重要と考えられるのが最初の30年といわれることから、そうしました。

「お客様の顔が見える林業」を模索する中で、林業の舞台となる山は檜原村にいくらでもある。では、お客様はどこにいる？ そう考えたときに浮かんできたのが、お客様は東京にいないか、でした。檜原村から東京都心部まではクルマで1時間半ほど。それほどネックとなる距離ではありません。檜原村と都市住民がつながれば、と思いました。

しかし、具体的にどうかたちにしたらいいのか決めかね、そこから先が遅々として進みません。そんなとき、先に進むヒントになったデータが都政モニターのアンケート結果として公表されました。都市住民が森林に期待するものとしては、



東京美林倶楽部による植栽の様子

環境への貢献やスポーツ、健康、自然体験が木材生産を抑え上位に並びました。それをそのまま答えと受け取り、あとはそれに合ったかたちをどうにか整え、ようやく2014年秋、スタートしました。

第1期会員は募集口数満口の100口が集まり、2015年4月に植栽、7月に下草刈りを実施。4日間に分けて行った植栽には70口、150人が参加。その後、7月に下草刈りを実施。11月には「感謝祭」として、檜原村の山だけではなく、食や自然も楽しめるイベントも行います。

○ツリークライミング、山仕事体験、出前授業
多くの人に木や森林、林業、そして檜原村に親しんでいただきたく、一般の人を対象にしたイベントを行っています。

ロープを使った木登りであるツリークライミングや山仕事体験は、合わせて年間10数回開催。そのたびに多くの人が檜原村を訪れています。反対に私たちが都内の小学校・中学校に出向いて話しをする、という出前授業も行っています。

◆◆◆ 檜原おもちゃヴィレツジ構想

東京の木の使い道として、また山からの出口としての檜原村を生かそうと現在企画を温めているのが「檜原おもちゃヴィレツジ構想」です。いま「木育」という言葉で、生活に木を積極的に取り入れ、健康的に暮らそうという動きが活発になってきています。木のおもちゃも見直されています。檜原村を日本有数の木のおもちゃの産地にして、村の産業、観光にも貢献できればと思っています。

木に囲まれた環境の中で子どもを育てる

―自然に触れる「森のようちえん」と「木育」活動―

NPO法人もあなキッズ自然療育理事長 ● 関山 隆一

◆◆◆ 都会の森のようちえんのはじまり

横浜市の中でも、子育て世代に人気のまち、都筑区港北ニュータウン。その都会の中で園庭のない認可外保育園（横浜市認定保育室を含む）が地域の資源である自然公園を有効的に利用した保育を行っています。このような保育の形態は「森のようちえん」と呼ばれ、全国的にも注目されています。

発祥とされるデンマークでは、園庭の有無に限らず、近くの森を利用している森集合・森解散という園も少なくありません。日本においても地方を中心に共同保育型の森のようちえんが広がっています。

一方、地域で子ども達の遊ぶ姿が減少していることや、自然環境が身近にあるにも関わらず、そこに親子の姿が見かけられないなど、子どもの未来を暗示させる光景を目にします。そのような危機感から、日常的に子どもが子どもらしく生きる

環境を確保し自然に触れる保育を実現しようと、2009年に認可外保育施設として、3歳児7人の「もあな保育園」がスタートしました。

その後、育児困難な親への支援や小さな子どもを対象とした森のようちえんを実現すべく、現在0〜2歳児までの横浜保育室を開設。さらに小規模の保育施設や小学校以降の学童保育も行っており、地域における長期的な子育てサポートを行っています。

◆◆◆ 自然公園を活用

このような整備をしつつ、女性の就労支援としての保育所の役割を果たすなど、保育の質を保つための活動を行っています。

具体的には、日中は近くの自然公園を活用して森のようちえん活動を行い、毎日自然の中で子どもたちの五感を研ぎ澄ませるなど、感性豊かな子どもを育てています。季節感にあふれ、多様な生物がすむ森の中で、子ども達が木の実や多くの生

き物を探し捕まえることができます。木登りをしたり、落ち葉に埋れたり、時には氷の冷たさが痛さに変わり涙を流したりと、自然という最高の遊び場の中で保育をしています。

◆◆◆ 木に囲まれた室内環境の中で子どもを育てる

もう一つ私たちが掲げる保育の特徴として「木育」と呼ばれるものがあります。これは木質化した園舎や木のおもちゃなど、木に囲まれた室内環境の中で子どもを育むことです。長時間子どもを預かる保育では、施設での生活が子どもの乳幼児期の生活そのものとなります。従って、どのような環境の中で子どもが乳幼児期を生き、どのような大人が子どもと接し、寄り添うかということが、非常に重要なこととなります。都会の中の保育園でも身近な自然環境を利用し、外遊びを充実することは実現可能であります。また園舎に戻ってきて自然を取り入れた環境の中で生活することで、安心して子ども達が過ごせる環境を確保できます。



乳幼児の小さな不思議の世界



自然の中での子どもらしい世界

私達の木育の活動の中で特徴的なのは、健康と持続可能な社会というものをテーマにしていることです。例えば、室内の木材のほとんどが、東北の栗駒高原から取り寄せた燻煙（くんえん）杉です。これは、もあな保育園の開所にあたり、私達が掲げる持続可能な社会づくりのコンセプトにあった園にすることを決断した時に使用を決めたものです。栗駒高原にある木材会社が、木材を燻煙乾燥し、防腐防虫剤につけないという試みをしてきたことや、現地の端材をすべてバイオマスエネルギーの原料となるペレットにするための工場稼働などを先駆的に行っていることを知りました。その先駆的でかつ私達の方針にあった活動を行っていることから、現地と消費元としての関係を築きました。

建具に関しても、接着剤を使用しない組工法と



四季を感じる！落ち葉の寝床

いう昔ながらの技法を行う業者に依頼し、有害物質が空気中に飛散しない室内環境を実現しました。最近では、化学物質に反応して苦しむ化学物質過敏症の方が増加傾向にあるといわれています。小さな子ども達が生きる環境としては、極力健康的な空気環境も大事なポイントかと思ひ、以降も健康木材を使用しています。

また、木のおもちゃやテーブル、椅子に関しても、同様に輸入品ではなく、国内で生産している業者の中から選ぶことにしました。その中で、福島県南会津町の木工業者を直接知る機会を得、消費者と生産者の関係を築きました。このような木育を実現することで、子ども達は木のぬくもりを感じたり、無垢の床材の上で寝転んだりすることで、気持ちを落ち着かせ、室内でも心地よく生活しています。



大人も遊ば〜と語る筆者の関山さん

都会生まれ、都会育ちの子どもにとっては、その土地が「ふるさと」です。ですから、その地域の特性や資源に大人が気づき、それらを活用して子育てをしていくことは重要なことです。もう一つ重要なことは、地方と都市を繋げる関係性は、国内における需要と供給の関係に似ており、その関係を縮めることが持続可能な社会づくりにつながるといことです。

持続可能な社会を築く活動

豊かな森を持つ素晴らしい国である日本では、人々は昔から森の恵みを感じて生きてきました。そのルーツや伝統、文化を継承していく上で、まずは子ども時代から身近な自然環境を感じることで感性豊かな子どもが育っていくと思います。

さらに、子ども達が育っていく中で、自然を感じ体験することは、次の世代に今ある資源の大切さを教え、それを守ろうとする意識を育てるという、持続可能な社会を築く活動に結び付くと思います。そのためにも、森のようちえんや木育のような活動が今後広がっていくことを期待します。

病院や空港、大学の木質化

—「自然のぬくもり」を生活者、子ども達に提供—



酒井産業株式会社専務取締役

● 酒井 久徳

健康な森林を残すことを目指して

「酒井産業株式会社」は昭和10年に伝統工芸木曾漆器の町、平沢に製造卸販売の店として創業しました。その後、「産地と共にものづくりをして理解して使う」を提唱する漆器木製品卸業へと変

遷。平成18年から林野庁が進める木育に参画し、その追い風もあって子育て

木づかいテーマの新しい取り組みが増えてきました。

私たちの心には「森と産地と人を繋ぐ」との思いがあり、天

塩尻市子育て支援センターのこども広場



然素材活用 of 文化を大切にしながら伝統技術を継承活用し、漆器家具インテリア生活用品玩具大型遊具などの開発生産供給を行っています。特に国産材の普及に取り組み、「植えて育てて大切に長期利用して土に戻すサイクル化」に取り組んでいます。この流れから健全な森林の形成と生態系が整った環境と資源循環をお手伝います。そして、子ども達が自然素材に触れて健やかに成長することや、森林や木の果たす役割を多くの人々に楽しく伝えながら、将来豊かな生態系を育む健康な森林を残すことを目指しています。

この「自然のぬくもり」を生活者に、そして次世代を担う子ども達に提供するために、木のおもちゃや遊具、室内環境の木質化、さらには木育活動に取り組み、教育・養育・福祉・公共施設・一般事業所に木のぬくもり溢れる製品や施設を提供しています。

木質のこども広場や授乳室

塩尻市では、全国に先駆けて木育を積極的に導入しています。同市関係の施設をはじめ、弊社がお手伝いしている事例を紹介します。

○こども広場

塩尻市の商業施設を利用した広大なこども広場に、県産木材を活用した木製床や大型木製遊具を設置しました。ままごと遊びの中心となるキッチン、ボーリング遊び、ひのき玉のお風呂などの大型遊具を設置しており、毎日多くの親子連れ、孫連れが遊んでいます。広いので他の子とも知り合いになり社会性も育まれているようです。

○病院の木質化

長野赤十字病院の小児科病棟こども広場のフロアに取り外し自在の木製プレート敷き詰めたら、年中素足で過ごす子ども達が遊んでいます。館内空調のオープンルームながら「ここは床暖房ですか？」と聞かれるように冬暖かく夏涼しく感じられることや、木の香りや優しい木目に癒され、万が一の嘔吐物にも素早く取り替え対応できることなどが評価されています。また、廊下壁に木の節付き板が張られ、院内に落ち着き感を醸し出しています。

○空港の木質化

信州まつもと空港では、飛行機を出ると県産材の桧や唐松・杉などのアーチが出迎えます。従来、無機質な通り道が長野県の木をあしらったインテリアで高峰アルプスと森林の国、長野県を強く感じさせる施設になりました。木曾桧の陳列棚には県産品が並び、1階のエントランスには県産木材の唐松の木口や年輪を感じる堅牢で柔らかな雰囲気「レイヤードウッドベンチ」が置かれ休

憩に利用されています。触れるとほのかな温もりを感じることも出来るのも木製の魅力になっています。

○スポーツ施設に木育こども広場開設

白馬五竜スキー場では、スキーに疲れた親子連れが休憩する遊び場を改装しました。滑り台、隠れ家、ひのきプール、木登りポールなどがあり、こども達が夢中で遊んでいます。親は高い位置にあるカウンターでお茶しながら見守れる設計になっています。このスキー場は海外から長期滞在家族旅行のお客さんも多く国際交流の場にもなっています。

○自治体に木質授乳室設置

自治体の建物内でゆっくり授乳やオムツ換えが出来る場所がなく窮屈なトイレしかなくて困っているという子育て中の県民の意見が取り上げられ、県産材を使って建物内の空きスペースを利用して簡単に組み立て設置できる部屋を設計し納入しました。全て県産木材利用、県の動物や樹木花



信州まつもと空港の木のアーチ



信州大学旭キャンパスの食堂



ロボ木づくりの様子

を描き閉塞感のない部屋になりました。

○大学施設の木質化

信州大学の演習林の間伐材を利用して同大学の食堂を改装。弊社の製品である「木かべ」のデザインをそのまま利用して演習林の木を使って製作し設置しました。既に全国生協の共同購入で30枚キットが販売され供給が伸びています。こどもの落書きで困っていたのにあつという間にひのき壁が出来た、猫の爪研ぎにもなり傷めば取り替えている、という嬉しい事例もあります。

○箸作りキット

小さなお子さんでも楽しくかんたんに削りができ、ひのきのお箸を削りだして作ります。各地の自治体などのイベントでこどもが楽しめお土産として持ち帰れるので好評。四角いヒノキ棒を4面順番にけずり、その人の手の大きさに合わせて適切な長さで調節します。一番喜ぶのがカンナ削り、シュルシュルと心地よい削り音がこどもの心に満足感を与えているのかもしれない。かんたんな屑を袋詰

めすれば立派な浴用ひのきの香りの出来上がり。

○ロボ木

木育の第一人者、島根大学の山下先生が考案した木育推進ツールです。幼稚園児でも作れる板とダボ（丸棒）で組み立てる桧製のロボット。家にある布切れやボタン、毛糸などで飾れば、話し相手の出来上がり。年末までには、ロボ木の絵本を製作。5カ国語に翻訳の予定で、地球規模で森林を大切にし環境に貢献する人を育てる効果を期待しています。弊社はこの事業にロボ木や枝のメダルを供給していきます。

このほかにも、いろんな木育事業の推進に興味と提案力を持って取り組んでいきます。

◆◆◆ 木づかいの輪を広げよう

外国の木が安く大量に入るので日本に余りある国産木材の需要供給が滞り、ビジネスにできないことで管理放棄や持ち主不明、土地の境界が判らない森林が多いと聞きます。国産材が使われないと端材に至るまで流通量が少なくなり木材加工製品化にも支障が出ています。

「一緒に木育に取り組み木づかいの輪を広げましょう。」私たちは地球規模での環境改善と保護育成に向けて、国産材の良さを多くの人に認知いただき需要を高める必要性を強く感じています。日本の森林と地域木材利用による自然素材製品が発信する「木」を思い、日常の生活に「木」を使った製品供給をしながら木育を広げる活動を続けていきます。

木育で、地域の森づくり・人づくり —学校や市町村との連携など「木育30年ビジョン」—

岐阜県恵みの森づくり推進課 主任技師 ● 長沼 慶拓

「ぎふ木育30年ビジョン」とは

岐阜県では、平成18年3月に「岐阜県森林づくり基本条例」を制定し、「ゆるぎない長期的展望と県民協働による持続可能な森林づくり」を理念

岐阜の大切な財産である森林を県民全体で守り育てていく機運を醸成する施策を実施しています。平成25年には、「ぎふ木育30年ビジョン」を策

定し、人が生まれてから次の世代を育てるための30年間を目安として、段階的・継続的な施策を進めています。このビジョンでは、「ぎふ木育」を「岐阜県の豊かな自然を背景とした森と木からの学び」と定義し、最終的に「森林に対して責任ある行動をとることができる人材」の育成を目標に、そのために必要な段階的な取り組みをステップ1から6として示しています（図1参照）。ビジョンを県民が共有することにより、森林に関わる様々な主体による様々な活動がそのみで完結するのではなく、次のステップへとバトンを渡すように、「つながり」を意識し、目指す姿へと一歩一歩進んでいくことを目指しています。

各ステップに応じた取り組み

ステップ1、ステップ2に関しては、平成24年

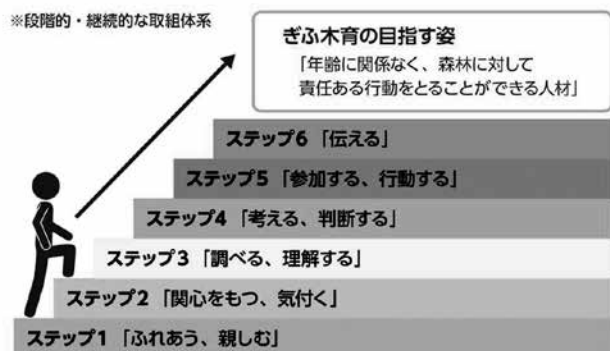


図1「ぎふ木育30年ビジョン」に示すステップ

として、「岐阜県森林づくり基本計画」を策定しました。平成24年度から進行中の第二期計画では、施策の柱として「木育・森林環境教育の推進」を掲げ、県土の8割を占め、ふるさと

度に日本グッド・トイ委員会と協働で開催した「木育キャラバン（木のおもちゃで自由に遊ぶイベント）」を契機に、岐阜県オリジナルの「ぎふ木育キャラバン」をJR岐阜駅前で毎年開催し、多くの家族連れが木に触れ合い親しむ機会を設けています。この取り組みは現在、県内4地域でそれぞれの特色を盛り込んだプログラムにより開催する「ぎふ木育地域キャラバン」に発展しています。

また、保育園や幼稚園等に対する、県産材を活用した木育教材（おもちゃ、加工キット等）や家具等の導入経費の助成、親子行事等へ木育指導者を派遣する「木育教室」を行い、乳幼児期から木に触れ合い親しむ日常的な環境づくりに取り組んでいます。今年度からは、「いつでも、だれでも木育」をキャッチフレーズに、児童館、図書館、子育て支援センターなど、地域住民が自由に訪れることのできる施設を対象に、常設版の「ぎふ木育ひろば」の設置支援を実施しています。今年度は県内21カ所に木製品に囲まれた空間で木のおもちゃで遊ぶことのできる場所が開設されます。こうした取り組みを行う際、県や市の子育て支援行政と連携し、「ぎふ木育」が子育て世代の癒しの場づくり、コミュニティづくりにも役立っていく点をアピールして進めています。

ステップ3、ステップ4に関しては、小中学校、高等学校、特別支援学校における「緑と水の子ども会議」が挙げられます。教育委員会と連携し、総合的な学習の時間や理科、社会の時間を活用して行う森や木に関する学習に対し、講師の派遣や資料の提供等を実施しています。今年度は87校の約4600人を対象に、森や川の生きものの調査や



「ぎふ木育大交流会」の様子

ぎふ木育30年ビジョン ……→「行動する」人づくり

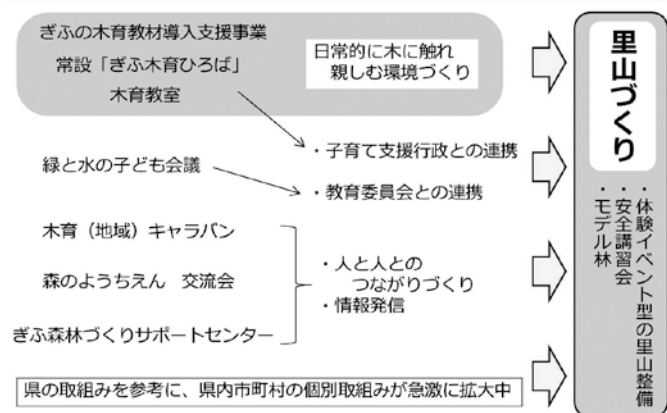


図2 現在実施中の「ぎふ木育」施策概念図

た。なお、ここまで述べた取り組みの多くは、県民税に上乗せしていただいている「清流の国ぎふ森林・環境税」を活用して実施しています。県民一人ひとりが税の負担という形を通して

将来にわたり、地域の森林を健全に守り育ていくことが我々のミッションであり、そのためには、特に森と人との接点である「里山」が重要です。里山づくりに関わるNPO団体等が活躍できるモデル林の設置、安全講習会の開催、体験イベント等の広報支援などを行っています。が、「ぎふ木育」を経験した子どもたち及びその親世代が、かつては「あたりまえ」であった里山とつながりを取り戻し、県民協働による持続可能な森林づくりを進めるためにも、「ぎふ木育30年ビジョン」による「行動する人づくり」を進めていきたいと考えています。

「里山」が重要

こうした県の取り組みに続く形で、県内市町村でも木育の取り組みが始められています。特に、美濃市が積極的で、新生児へ地元産の木のおもちゃをプレゼントする「ウッドスタート」や道の駅への「赤ちゃん木育ひろば」の設置に取り組んでいます。他にも、中津川市、山県市などが独自の木育プログラムの開発や乳幼児健診の際の木育講座の開催等に取り組んでいます。こうした市町村の動きは今年度急激に拡大してきており、木育に関する相談も多く寄せられています。

市町村との連携

て、自らもこうした活動を支えている、こうした活動とつながっている、ということ認識してもらうことも重要と考えています。

をつくることを意識しています。例えば、前述した「ぎふ木育地域キャラバン」を開催する際には、地域の保育士、教員、木匠、自然体験指導者等を対象に木育に関する事前研修会を開催し、キャラバンで披露する地域オリジナルのプログラムを参加者が一緒に考えるという機会を設け、その後のネットワークづくりにつなげています。

また、子育て中のお母さんたちを中心に活動されている「森のようちえん（自然の中での保育や幼児教育）」の県内の実践団体を対象に、今年9月に「ぎふ木育大交流会」を初めて開催し、2日間で延べ700人を超える参加者があり大成功に終わりました。こうした場で生まれた人と人とのつながりは、より多くの県民に「ぎふ木育」の理念を知ってもらうための大きな可能性を感じさせるものでした。

「ぎふ木育」で人と人のつながりづくり

「ぎふ木育」を推進するにあたっては、「モノ・コト」以上に「人」が重要であり、そのつながり

林業体験等を実施しており、体験を通じて森林を理解し、その大切さを考える機会となっています。ステップ5、ステップ6に関しては、県内各地のNPO団体等が行う木育活動や森林づくり活動を支援するために、「ぎふ森林づくりサポートセンター」を開設しています。県内で行われる様々な関連イベントの情報を集約・発信し、「参加してみたい」「多くの人に伝えたい」という想いを支援しています。情報発信のほか、用具の貸し出しや活動に関する相談も受けています。

木のおもちゃとの触れ合いや木育スペースの整備 ―「木を使って森を育てる」意識の醸成―



鳥取県林政企画課 農林技師 ● 熊澤 ゆかり

県民運動 「とっとりグリーンウェイブ」

鳥取県では、平成25年5月に県西部の南部町で開催した第64回全国植樹祭を契機として、県民自らが環境のために行動する県民運動「とっとりグリーンウェイブ」の取り組みを進めています。また、鳥取県の豊かな自然や住民同士の強い絆を生かし、地域全体で子育てを支えることを目指す「子育て王国とっとり」も推進しています。

これらを背景として、県内の森林面積の60%以上が45年生以上となるなど、森林資源が充実しつつある中、「木を使って森を育てる」という県民の意識を育み、「とっとりグリーンウェイブ」の取り組みをさらに広げるため、平成26年度より、主に未就学児を対象とした木育に取り組んでいます。

未就学児の木育スペースを整備

これまでも、森林体験イベントや木工教室などの開催により、森林や木材の良さを県民に伝える広い意味での木育は実施してきました。しかし、未就学の子どもを対象にした取り組みは、これまでほとんどありませんでした。そこで、あまり木に触れる機会のない未就学児が木と触れ合う機会をつくるため、木育スペース「とっとり赤ちゃん木と森の広場（愛称「木育広場」）を整備しました。木育広場は、鳥取県産材を使用すること、3つ以上のおもちゃを備えていること、移動して使用することができるよう設置・解体・撤去・収納が容易な構造であることを条件として、県内の建築・設計関係の学部がある大学及び高専の3校にデザイン作成を依頼しました。大学等で、本県の森林・林業の状況や木育の意義等を授業に取り入れることにより、未就学児が楽しみながら木に親しめる9作品のデザインが出来上がりました。その中から、木のおもちゃの専門家、木工作家、保育士などで構成する審査会で、鳥取砂丘など県内の自然や街並みを表現した1作品を選定し、このデザイン



とっとり赤ちゃん木と森の広場（森林公園「とっとり出合いの森」）

ンをもとに、県内の家具メーカーが安全性を考慮して製品化を行いました。

木育広場は、平成27年4月から県内の保育所などに貸出しを行い、同年8月までに延べ4千人以上の子どもたちが利用してきました。同広場を利用された保育所からは、再び利用したいと要望をいただくこともあり、子どもたちにとって、木育広場の木の感触がとても心地良いものとなっているようです。また、保護者の方などからも、木目の美しさや木の香りに癒されると好評をいただいています。

木育広場は、今後も県内の保育所等を巡回し、未就学児等が木と触れ合い、木の良さを感じられる木育スペースとして活用していく予定です。



木育キャラバン in とっとり (鳥取県湯梨浜町)

木のおもちゃに親しむ

このように、主に未就学児を対象とした木育の取り組みをはじめましたが、本県では、まだ木育という言葉が十分知られていないことから、木育の普及を図るため、平成26年度から東京四谷にある東京おもちゃ美術館及びNPO法人日本グッド・トイ委員会の協力のもと、「木育キャラバン in とっとり」を開催しています。平成26年度は県東部の鳥取市、27年度は県中部の湯梨浜町で開

催しました。木育キャラバンの会場には、県産材で作られたおもちゃを含め国内外の300点以上の木のおもちゃが集められました。来場者は、木のおもちゃとの触れ合いや木育キャラバンの会場に設けた県産材を使ったワークシヨップでの体験を通じて、木の魅力を感じ、木育についての理解を深めました。

また、昨年度の木育キャラバンでは、おもちゃの専門家、保育士、林業関係者、森林を積極的に活用している町等が参加して、今後の木育について話し合う「木育円卓会議」を開催しました。これをきっかけに、平成27年度より、市町村等の木育の取り組みを支援する事業を創設し、この事業を活用して地元の製材所や森林組合などの協力で、地元の木材で作った木のおもちゃを地元の子育て施設で使ったり、赤ちゃんの誕生祝いとして地元の木のおもちゃを贈ったりする取り組みが始まっています。

また、平成26年11月に、木育に関心のある親子を対象に、山から伐採された木が加工され、住宅に使われるまでを見学する「木育グリーンツアー」を開催しました。地元森林組合の方から伐採作業などの説明を聞きながら、伐採現場で見た木が、住宅に実際に使われていく過程を見学することで、これまであまり認識がなかった木を伐採して使うことが、森を健全に育てることにつながることを大人から子どもまで理解いただけたと考えています。

これらの木育の取り組みにより、「木を使って森を育てる」という意識が県民に醸成され、それによって地域の森林資源の利用が進み、再び地域の森を育てる循環が生まれることを期待しています。

「木づかいの国とっとり」の展開

本県では、平成23年9月に、「鳥取県産材利用推進指針」を改訂し、今後、県が整備する公共建築物については、原則木造化とする基本方針を打ち出しました。これを受けて、県内全市町村において、公共建築物についての木造化・木質内装化を進める指針を策定しており、数多くの保育所等の公共施設の木造化が図られました。また、本県では、県内事業者の施工により、木造住宅を新築する場合や、一定量以上の県産材を使って一戸建て住宅や共同住宅を増築または改修する場合の費用の助成も行っています。

さらに、平成27年度からは、新たに非木造の保育所等の内装の木質化の支援、商業施設の子育てコーナー等の壁や床を県産材で改修する取り組みの支援を行っています。そして、県内の森林では「森のようちえん」、「森林セラピー」といった、森林の新たな活用も始まっており、木育による「木を使って森を育てる」意識の醸成と併せて、これらの多面的な取り組みの展開により、地域の森林資源を活用する「木づかいの国とっとり」の実現を目指していきたいと考えています。

来年1月23・24日に東京・池袋の東京芸術劇場でとっとりでの暮らしを演劇をまじえて紹介するイベント「とうきょうの真ん中で、地方での子育て・暮らしを考える―ととりの場合」を開催し、この会場内に木育広場を設置する予定です。ぜひご家族でお越しいただき、鳥取県産材の魅力を感じていただきたいと思います。

国産材をつかった玩具づくり

—小中学校に木工工作キットを配布—



株式会社木遊舎代表取締役

徳島 忠久

創業

木遊舎は「子供達の健全で穏やかな成長と、豊かな情操を育むお手伝いを…」「全国の各家庭の玩具箱の中に、一個でも多く木遊舎の作った玩具を届ける」をテーマに、1985年愛媛県松山市で、県下初の木製玩具店として創業しました。手づくり木製玩具ということで、各方面から関心を

得て、8坪の小さな工房は多くの注文と、徐々に工具・機械類が増えて手狭になり、より良い製作環境をと、1992年に伊予郡砥部町広田地区（旧伊予郡広田村）へ移転、1995年にはさらに広い工房を求めて、お隣の伊予市中山町（旧伊予郡中山町）へ移転しました。伊予市中山町は2005年旧伊予市、双海町とが合併した山間の町で、松山市中心部から国道56号線を南下し、犬寄峠を越え、25^分程のところであり、山間率は85%。そのうち杉65%、桧29%となっています。当初夫婦二人で始めた脱サラ玩具工房は、中山

町へ移り旧町内施設であった木工体験施設の運営を委託され、以来指定管理者として現在に至り、スタッフは15人になっています。

成長した森を活用する時期

日本の森林は、林業の担い手の高齢化や木材価格の低迷により、一部では十分な手入れがままならない状況です。荒廃した森林は、台風や大雨によって土砂災害を起こしやすくなっています。木材が成熟したことで、二酸化炭素を吸収する機能が低下しています。温暖化防止のためにはぐんぐん成長する若い木が必要です。ちなみに我々の工房の周りも深い緑の杉・桧の森です。

現在、拡大造林政策によって、先人達の努力により生み出された多くの森林が、収穫期を迎えています。収穫期を迎えた森林を伐採活用、植林し、育てるという次世代への循環を円滑にすることで、日本の森林は元氣になります。そのためには、国産材を積極的に利用し、需要を高め資金を



愛媛県産材を活用したスギ木馬完成品

山に還元しなくてはなりません。いま日本は成長した森を活用することのできる時期にさしかかっているのです。

ヒノキ丸太生産量が全国有数の愛媛

地元愛媛は、原材料としての桧丸太生産量が平成19年まで日本一を誇っており、県知事のトップセールスに伴う建築用木材のブランド材（媛すぎ媛ひのき）も追い風となり、愛媛県産木材の需要が拡大してきました。

J・VERKレジット（オフセット・クレジット）市場での取引の対象となった温室効果ガス削減・吸収量）によるカーボンオフセットについて



愛媛県産材を活用したひのききりんの輪投げ



愛媛県産材を活用した面展示ほんたて



木工体験キット

も、愛媛県はいち早く取り組んでおり、様々なイベント等で、森林吸収型のカーボンオフセットが活用されています。

商品購入で森林手入に資金が回る

木遊舎では、出荷するすべてのアイテムに、愛媛県産オフセット・クレジットを活用した二酸化炭素の排出権を付加しています。これにより木遊舎製品を購入していただいたお客様が、日常生活で排出した二酸化炭素を1製品で1キロ相殺することが出来ます。つまり、商品を購入していただくことで、地元愛媛の森林の手入に資金が回る仕組みとなっています。

中でも公益財団法人愛媛の森林基金から受託さ

れ、愛媛県内小中学校への県産材木工工作キット配布事業として、今年度約7000キットを製作配布しており、ここで使用した杉・松の県産材キットで20立方メートル、7ト（CO₂）のオフセット・クレジットが消化されています。

愛媛県下の小中学校に、木工工作キットを配布することで児童生徒のみなさんが、森の循環や、森林の現状に関心を深め学ぶことのきっかけになっています。2015年夏までに届けた工作キットは、延べにして約6万キットとなりました。伊予市中山町への工房移転直後から、定番商品について、県産材への積極的な転換を図りこれまでのヨーロッパアンビーチ（ブナ材）や、ラジアタパイン集成材等を、愛媛県産無垢材や松集成材へと移行をそれぞれ進めています。

県産集成材への移行をすすめていく過程では、県産材松の肌合いが美しいことからインターネット、その特性を説明し、公募で「天使のhope（ほっぺ）」と決めました。天使のhope（ほっぺ）とは子供達の未来へホープ（希望）と、文字どおり赤ちゃんの「ほっぺ」の意味です。このネーミングの決定過程はお客様の反応がよく、楽しいイベントでした。

県産材使用の成果

材料を小物から大型書架、保育家具に至るまで、県産材に数年かけて切り替えた結果、当初心配した作業性や質感に関して問題もなく、むしろ好評で売り上げも予想以上に伸びました。

余談ですが、国産材（愛媛県産杉・松）へ移行することで、木屑がバイオマス発電所、家庭、事業所等で使用する燃料になり、かつては焼却して煙にしていた木屑が、燃料エネルギーとして再利用されています。弊社でも木屑をペレット工場に持ち込み、木屑の量の数パーセントが、冬場のペレットストーブの燃料として還元されており、そのうれしいシステムを歓迎しています。

木のぬくもりを教育現場に ―市内小学校に飢肥杉の積み木を導入―



日南市教育委員会学校教育課 指導主事

・ 中條 隆裕

林業が盛ん

日南市は、宮崎県の南部に位置し、年間を通して温暖な気候で、プロ野球やプロサッカーチームのキャンプ地にもなっている。市の総面積の約78%が山林で、古くから飢肥杉（おびすぎ）による林業が盛んであった。現在、日南市では、「人づくりこそがまちづくり」との考えのもと、「創客創人」というコンセプトを市全体で共有し、それに基づいた様々な施策を行っている。

飢肥杉で製作した積み木 「日南キューブ」

埼玉県に本社を構える「花まる学習会」が使用している木製の積み木教材にヒントを得て発案したのが、飢肥杉で製作した積み木「日南キューブ」である。こうした企業とのコラボは全国初となる。同学習会の積み木は、立方体をいくつか組み合わせたねじれのあるブロックだが、本市では、

小学1年生を対象として、子どもたちのアイデアで楽しく遊んでもらうことを念頭に、1辺3・5寸の立方体というシンプルな形を導入することにした。1辺3・5寸というのは、立方体の角、辺などを立体的に感じ取るのに適切な大きさである。また、1セットの個数は64個。これは、縦、横、高さ4個ずつ並べたときに形は同じで大きさが違う立方体に偶然に出会うことをイメージしている。もちろん、64個の積み木を入れるためのケースも飢肥杉製である。

算数・理科の学習に有効

平成27年4月、この「日南キューブ」を市内全小学校の新生（約450人）に入学記念品として贈呈した。その効果を、本市教育委員会では次のように捉えている。

「積み木遊びの時間を計画的に設定し、取り組ませることで、学習する際に必要である学習習慣を身に付けさせることができる。あわせて、児童

を観察することで児童理解にもつながる」。

小学1年生は、義務教育がスタートする学年であり、教科等の学習における基礎を最初に学ぶ学年である。入学後の学習を有意義なものにするためには、基本行動（先生の指示に注目する、自席に座って指示を聞くなど）を身に付ける必要がある。今回導入した積み木を一つの活動として取り入れることで、遊びながら基本行動を身に付けることができると考えている。また、教師は児童の遊ぶ姿を注意深く観察することで、他の活動では見られない、児童の特徴も把握することができる。「立体感のある積み木で遊ぶことは、より効果的に点や線、面、立体などを体感でき、ひいてはそれが算数・数学、理科の学習につながっていく」。

算数・数学の平面・立体図形の学習において、課題の難しさに直面する児童生徒が多い。それは、図形の構造を画像として把握し、そのイメージを



飢肥杉積み木「日南キューブ」



積み木で遊ぶ児童。2人で協力して積み木を積み上げている



5月に行われた公開活動時の様子。児童が自分の発想で各自積み木を積み上げている

操作することができないところにあると考えられる。このように小学校の低学年から、さまざまな操作を豊富に体験させるようにすれば、平面・立体図形の問題に直面したとき、図形に対する苦手意識を解消し、よりよい問題解決の探求につながると期待している。理科の力学分野の学習においても将来的には有効であると考えている。

林業への理解を深める

「木育の面からも効果があり、郷土を代表する樹木である『飢肥杉』の理解につながる」。

「日南キューブ」に触れることは、郷土の樹木である飢肥杉の理解を深めることにつながり、木の文化を理解させたり、暮らしの中に木を取り入れたりすることのきっかけにもなる。また、他教

科との関連が図られれば、さらに林業への理解を深めることにもつながると考えている。「日南キューブ」のふたは飢肥杉でできているが、梅雨の時期には、水分を吸って膨張し、ふたが閉めにくくなる。何気ない「ふたを閉める」という行為を通して、児童は木が生きていることを自然に学んでいる。また、木の香りには癒しの効果も期待できる。

市内小学校に導入

「日南キューブ」を小学校に導入するにあたり、遊びの例をまとめた活動例集を作成した。作成に当たっては、市内の教職員でプロジェクトチームを編成し、花まる学習会からもアドバイスをいただき、そのノウハウも生かしながら約半年の研究

の上に1冊のテキストとして完成させた。この活動例集は、朝の時間や業間等で活動することを想定し、10分程度の活動例としてまとめられている。また、活動の仕方を示すだけでなく、活動を通して児童のどんな面を観察するのもかも提示しており、教師が行動の観察にも意識して取り組むことができるように構成されている。

今年5月には、市内小学校の1年生担当者を対象にした研修会を実施し、実際に手に取って遊んでもらうことで本事業の趣旨等を理解してもらった。また、同月に開催された市教育講演会では、講師として花まる学習会の代表である高濱正伸氏に御講演いただいたが、講演の前には、市内小学校の1年生学級で、高濱氏自らが日南キューブを使って公開活動を行った。先生方は、事前打合せなしの約20分の活動で、変化していく児童の表情に驚きの声をあげていた。

今後の計画

本事業は、学校現場での導入が目的であったが、ニュース等で取り上げられたことで購入に関する問い合わせもあり、市水産林政課と市内事業所の理解をいただき、現在は一般向けにも販売されている。

現在、小学2年生用の活動例集の作成を進めている。本年度は、小学2年生用の活動例集を、平成28年度は、小学3年生用の活動例集を作成し、小学1～3年生でこの「日南キューブ」を活用できるようにする計画だ。

県産材を使った森のおもちゃ美術館 —木材の需要を取り戻し、新たな森林業を創出—



国頭村経済課課長補佐 ・ 大城 靖

ヤンバルクイナの郷、国頭村

国頭村は、沖縄本島の最北端に位置し、那覇市から車で2時間半ほどの距離にあり、東は太平洋、西は東シナ海に面している村です。村の中央部に

は、沖縄本島最高峰の与那覇岳（503m）を含め島の背骨を形成する山々が連なり、それらを水源とする多くの河川は、水清く豊富な水量を有し、沖縄本島の重要な水源の役割を担っています。

また、村土の84%を占める山林は、「やんばる（山原）」と呼ばれ、ノグチゲラ、ヤンバルクイナ、ヤンバルテナガコガネなど貴重な国指定天然記念物が生息し、生物多様性の豊かな森は「世界自然遺産」の登録に向けて動き出しているところです。

国頭村は、その豊かな森林資源をいかし、古くから首里城（那覇市・世界遺産）建築や琉球王朝の重要な交易船の木材を取めてきており、また、先の大戦で焼け野原となった沖縄本島中南部に家屋の建築材や薪炭材等、戦後復興材を供給しました。

しかし、近年の木材からコンクリートへの生活様式の変化や、県外産スギ材等の移入材の流入により、国頭村木材の需要は低下傾向にあります。こうした状況を受け、森林の持つ多面的効用を最大限に活かす新たな森林施業「森林業」の創出を目指し、森林セラピーや森林ツーリズム、特用林産物の生産などに取り組んでいます。

また、木材の需要を取り戻す取り組みの一つとして、10年ほど前から村内の小学生、全児童の机・

イスをやんばる産材に切り替え、国頭村森林組合では、製材からでた端材を利用し、リュウキュウ松の積木5000ピースを制作し、県内の各種イベントに貸し出し、村産材のPRに努めてきました。

「木育」との出会い

そんな中、平成24年2月に全国で国産材利用の推進活動を展開している東京おもちゃ美術館の多田館長と出会い、「木育（暮らしの中に木を取り戻す活動）」を知り、その伝達手段として、木製おもちゃが次のような面で有用だと気付かされました。

①おもちゃは、幼児が手に取り遊ぶ道具ですが、幼いころから木製おもちゃに触れていれば木の良さが肌に染みつき、それが勉強机や木製家具・木造住宅につながる可能性が高くなります。

②幼児は一人での移動は難しく、常に両親や祖父母が付いているため、木製おもちゃで夢中に遊ぶ子どもをみて、改めて木の良さに気付く大人も増えていきます。

③木製おもちゃは幼児が遊ぶ道具のため比較的小さな材料で制作可能で、端材などの利用も出来るため自然に優しく高付加価値の製品です。

そこで、木製おもちゃを足掛かりに、国頭村の最大の地域資源である森林及びそこで育成されている木材や林業を発信する拠点施設として、平成25年11月、国頭村森林公園内に東京おもちゃ美術館のバックアップを受け、「やんばる森のおもちゃ美術館」を整備しました。



森のおもちゃ美術館の利用風景

◆◆◆ 地元材を使った 「やんばる森のおもちゃ美術館」

「やんばる森のおもちゃ美術館」は、やんばるの森の60%以上を占めているスタジイが床材や室内入口のトンネル壁材に使用され、壁の棚には県内外のおもちゃ作家の厳選されたグッドトイが展示され、そのすべてが手に取って遊べるようになっていきます。

多田館長に「木目の美しさは日本一だ!」と言わしめた琉球松5000個が敷き詰められた「ヤンバルクイナの卵プール」は、美術館の一番人気のおもちゃです。また、六角形をした6種類の木材を壁に貼り付け、思い思いのデザインを描き出す壁面パネルは、お客さんにより日々張り替えられるため、毎日見るのが楽しみです。

今から約300年前の琉球王国の政治家で、山林の管理方法をまとめたことから、沖縄の林業の父といわれる「祭温」が植えたといわれる琉球松



木製のヤンバルクイナの卵のプール



木製の壁面パネル



木育キャラバン

の一種、祭温松が室内にミニチュメントとして配置され、森づくりの大切さを伝えていきます。

美術館のおもちゃには、木の温もりや香り、色合い、手触り、音などを感じとれる工夫が凝らされており、多様な感性を持つ子どもたちは、おもちゃ作家の意図を超えた遊びをしたり、違う種類のおもちゃを組み合わせて遊んだり、見ていてあきないほどです。

幼児の付き添いの両親の多くは、一緒に遊んだり夢中で遊ぶお子さんの姿を微笑ましく眺めたりしており、他の場所でも多く見かける携帯電話を操作する光景はあまり見られません。

美術館にお年寄りの団体が来ることもあります。その中には、おもちゃで夢中になって遊ぶ方や、木に触れながら子どもの頃森の中で遊んだ話に花を咲かせるグループもあり、この施設の魅力の多様性を改めて感じています。

さらに美術館では、国頭村まで足を運ぶことが難しいお子さんのため、移動おもちゃキャラバン

セットを用意しており、年10回ほど県内の各種イベントや保育所・幼稚園などの幼児施設に出向き、やんばる国頭の森のPR及び木育推進に努めています。

おもちゃキャラバンに参加した父兄からは、「おもちゃ美術館があることは知っていたが、遠くへ行けなかった。この機会があつてうれしい」との声が多く聞かれ、活動の励みになっています。

◆◆◆ 地域資源を最大限活用する 「森林業」の創出を

活動を開始して約2年になりますが、来園者は施設整備前に比較して倍増の1万5000人(平成26年度実績)に伸び、公園施設の利用者増加に大きく寄与しています。

美術館は、やんばる国頭村の森を発信する拠点施設というだけでなく、村の観光施設の一つでもあり、自然体験が主要な本村の観光施設の中で、雨天時の観光客受け入れの重要な場所にもなっています。

これからは、知っているが足を運ぶまでには至らないお客への動機づけ、来客したお客へのお土産開発、一度来たお客をリピーターに繋げる接客技術の取得など、まだまだ課題は山積しています。

世界自然遺産の声が上がるやんばる国頭村の地域資源を保全しながら最大限に活用する「森林業」の創出を図りながら、その拠点施設の魅力向上に努めていきたいと思っています。

沖縄においては、是非、国頭村までお越しください。ヤンバルクイナと共にお待ちしています。

赤ちゃんからはじめる生涯木育

―「ウッズスタート」で木工業を活性化―

NPO法人日本グッド・トイ委員会広報企画部

日本グッド・トイ委員会の木育推進事業

NPO法人日本グッド・トイ委員会（東京都新宿区）では、2010年より林野庁の木育の事業を受託し、川上から川下までを結ぶ「木育円卓会議」の開催や、木との触れ合いを楽しむイベント「木育キャラバン」を2015年度は、全国40カ所以上で実施するなど様々な「木育」事業を展開しています。

暮らしの中に積極的に木を取り入れ、赤ちゃんをはじめ全ての人が、木との出会い、触れ合いを大切にする。こうした取り組みを、私たち日本グッド・トイ委員会では、「ウッズスタート」と呼び、2011年からは自治体や企業と連携し、誕生祝い品として木製玩具を配布する事業を始め、それらの事業に取り組む自治体や企業と「ウッズスタート宣言」を行ってきました。

さらには、2015年より保育園・幼稚園向け

の「ウッズスタート宣言」にも取り組み始めました。

その他、赤ちゃん木育広場セットを全国100カ所に配布し、NPO団体やおもちゃコンサルタントと共に赤ちゃんサロンを展開中です。

ウッズスタート推進の背景

この「ウッズスタート」を推進する背景には、三つの理由があります。

○「ファーストトイ」は木のおもちゃで！

まず第1に、赤ちゃんが初めて出会うおもちゃ「ファーストトイ」は地産地消であることを推奨しています。感性豊かな乳幼児にとって、香り、さわ心地、味わいなど五感に程よい刺激を与える木のおもちゃは最適です。ところが、世界第3位の森林大国であり、ものづくりにおいても匠の技術が溢れている日本ですが、木材の自給率は驚

くほど低く、木のおもちゃに限っては数%を切っているといわれています。

○若いママパパを木のファンに！

第2に、若いママやパパを木のファンにすることに努めています。地産地消のおもちゃで、我が子と遊ぶことによって、木や森林に親しみを感じるようになり、木を暮らしに取り入れようとする気持ちが高まるようです。その後、学習機の購入や一軒家を建てたりする子育て時期において、親たちが木に親近感を持っているかどうかは、国産材消費量拡大に向けて木製品を選ぶ際の大切なポイントとなります。その時に、「この木はどこで育った木なんだろう？」と興味を持つことも大切です。日本人が日本の木を使うということは、日本の文化や技術を継承していくことにもつながります。

○地産地消で木工業の地場を育てる！

第3に地場の木工業の活性化を目指します。木のおもちゃを作ることで、木工業の振興につながっていきます。全国デビューの機会も日本グッド・トイ委員会が積極的につくり出します。誕生祝い品事業では、子育て支援といった枠組みだけでなく、地場産業支援にもつながる好循環作用を創り出すことに努めています。全国各地の地域や民間企業がウッズスタートに取り組むことで、未来を生きる今の子どもたちのために、日本や世界の環境をより良くしていくことが出来ます。



埼玉県秩父市での木育円卓会議の様相

自治体・企業向け「ウッドスタート」とは

「ウッドスタート」とは、日本グッド・トイ委員会が展開している「木育」の行動プランのことです。この活動では、「木」を真ん中に置いた子育て・子育て環境の整備をし、子どもをはじめとする全ての人たちが、木の温もりを感じながら、楽しく豊かに暮らしを送ることができるようにしていく取り組みです。

例えば、全国の自治体・企業向けには、生まれた赤ちゃんに地域材を利用した木製玩具を誕生祝い品としてプレゼントする事業や、子育て環境に

地域材をふんだんに取り入れ、木質化・木育化する事業など、以下の計6項目を展開していて、6項目のうち2項目以上を約束することによって、ウッドスタート宣言を公式発表し、調印式を行うことができます。

各地の木材や文化を活かし、こうした取り組みが森を守る循環型のシステムに発展することを願いながら、全国のウッドスタート宣言自治体・企業が、各地域・組織ならではの木育推進プログラムを展開中です。

ウッドスタート事業 6項目

1. 誕生祝い品事業―地産地消の木のおもちゃを新生児にプレゼント
地元の木工職人が地域材で作った木のおもちゃを新生児に贈る取り組みです。各地の木材や文化を活かしたオリジナル玩具づくりが着々と進んでいます。
2. 木育インスタラクター―地域で木育推進のリーダーとなる人の養成
私たちは、モノ（木のおもちゃ）と場所（木育ひろば）に加えて、人（木育インスタラクター）の養成にも力を入れています。この「人」が、その地域で、木と触れ合う場所を活かし、学びを提供し、木とともに生きる方法を提案していきます。
3. 子育てサロンの設立―地域材を活用した木質感あふれるサロンの整備
私たちは、「木」を真ん中にした子育て活動を進めています。そのシンボルとなるのが、「赤ちゃん木育ひろば」。日本の木力と魅力と、職人やアーティストの技と美学が結集した子育てサロンです。
4. 移動型おもちゃ美術館「木育キャラバン」の開催―素晴らしい木のおもちゃと出会い・体験できる木育キャラバンの実施
移動型おもちゃ美術館「木育キャラバン」が、全国各地に素晴らしいおもちゃとの出会いの場を創ります。誰もが木のおもちゃで遊ぶことができる空間を生み出し、国内外のおもちゃ作家による木製玩具を楽しんでいただける。それが「木育キャラバン」です。
5. 木育円卓会議の開催―地域の木育推進をみんなで語り合う円卓会議の開催
森林・林業・林産業に従事する人たちと、子育て支援関係者、自治体の担当者が一堂に会し、地域の今と未来を「木育」という切り口で議論します。
6. おもちゃ美術館の設立―東京おもちゃ美術館の姉妹館を設立
遊びと文化を大切に、地域の森林資源をふんだんに取り入れた「おもちゃ美術館」の姉妹館。これを地域の力で作り上げ、地域の魅力・遊びの充実を目指していきます。

2015年5月末現在で、全国の29自治体（東京都新宿区、東京都檜原村、埼玉県秩父市、長野県塩尻市、岡山県西栗倉村、熊本県小国町、宮崎県日南市、沖縄県国頭村など）、6つの団体（北

海道雨竜高等養護学校など）がウッドスタート宣言（2016年までに宣言予定の市町村も含む）をして、子育てに地域材を活かす取り組みを進めています。

また、企業でも、2015年7月末現在で8企業（株式会社良品計画、株式会社内田洋行、パルシステム生活協同組合連合会、パルシステム東京、はなまる学習会、サクセスホールディングス株式会社、認定NPO法人フローレンス、株式会社社長谷萬）が「ウッドスタート宣言」を行い、誕生祝い品の導入、保育園の内装木質化などさまざまな方法で「木育」が広がっています。

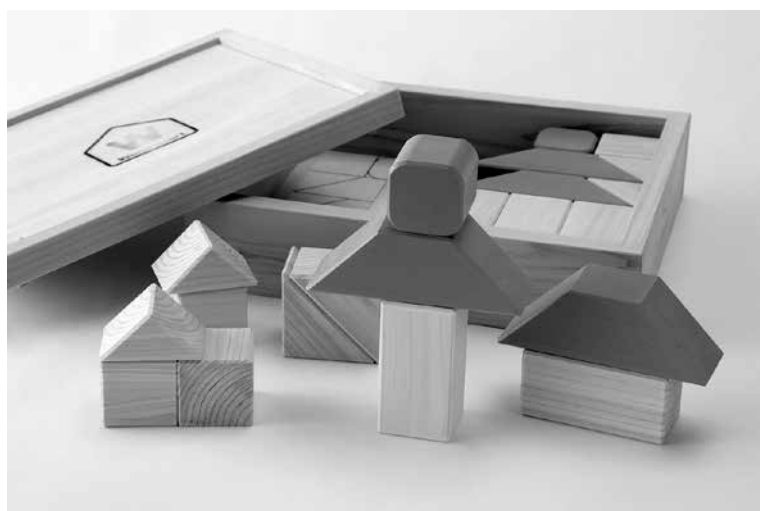
保育園・幼稚園向け「ウッドスタート」

2015年より取り組みを始めた保育園・幼稚園向けのウッドスタート宣言では、自治体・企業向けの「ウッドスタート宣言」とは異なり、自然と近づく知恵を絞り、自然を取り入れる努力をする意思を公式に表明することです。木々や緑と疎遠になりがちな子育ての営みにあって、森の恵みを取り入れ、教員や保育者たちが子どもと自然の架け橋となり、持続可能な健康と環境を志向する一その実践の努力を惜しまないウッドスタート宣言園を私たちは応援していきます。

○保育園・幼稚園向け ウッドスタート宣言

10カ条

1. 保育ナチュラリスト・木育インストラクターの資格を持った人材がいる



岐阜県美濃市の誕生祝い品「うだつみき」

木育インストラクター・保育ナチュラリストのそれぞれ資格をもった方が1人以上いること。「1年以内に取得予定」であればウッドスタート宣言をすることができ、資格を取得することでより専門的な保育を目指す。

2. 木育・自然教育の継続的な学びを行っている

樹木や草花、生きものなど、自然の営みに関して、園内にて木育やナチュラリストの素養を身につける研修を行ったり外部研修に積極的に参加している。

3. 木育絵本・木育おもちゃがある

自然や木を身近に感じたり、園庭やお散歩での気づきにつながるような絵本や木の手触りや香りを感じる国産材（地域材）を活用した木のおもちゃを取り揃え、十分活用している。

4. 環境や体にやさしい木の手入れをしている

子どもと一緒に、木のおもちゃや床など木製品のお手入れを適度に行うことで、もの大切さを考えることを十分している。

5. 環木や自然を活かした遊びや活動を取り入れている

木や自然物で何かをつくったり、感じたことを話し合うなど、保育のなかで日常的に取り入れ、緩やかな持続性を持った活動を展開している。

6. 自然を五感で感じられる園庭がある

ちょっとした自然からでも四季を感じ、多少に関わらず、子どもたちが自然を体感できる園庭づくりを日ごろから心がけている。

7. 自然と触れ合ってお散歩へのこだわりがある

森や林が身近になくとも、園の近くにある木や草花、そこで育まれる生きものとの関わり合いをもつような散歩をしている。

8. 園舎やその内装を木質化をしている

机・椅子などの家具調度品や園舎の構造、床や壁などの部分的内装の木質化などを国産材（地域材）で取り行っている。



熊本県小国町で開催された木育キャラバン

9. 木製遊具を使用している

遊具の一部が国産材（地域材）であったり、大型遊具がなくてもベンチやウッドデッキなどに地域材が活用されている。

10. 木の箸や器など食育の実践に木を使っている

木の食器や箸を使ったりするなど、生活面に木を取り入れ、日本の文化やものの大切さを感じるように努力し、木育と食育の

連携を目指している。

地域材の利用を進め、日本の森を元気に

2014年度から、「ウッドスタート宣言100×100プロジェクト」が始まりました。

「100」は自治体と企業の数を示しています。このプロジェクトでは、ウッドスタート宣言をしていく自治体と企業とを東京おもちゃ美術館が結

ぶことで、地域材の利用を促進し、「日本の森林を元気に」そして「暮らしの中に木育を」という取り組みを広げていくことを目指しています。

おもちゃをつくるだけでは、木材の消費量はそれほど増えません。しかし、誕生祝い品事業のアンケートでは、地産地消の木のおもちゃを手にとったことで、次のようなコメントがありました。

「風景としてしか見えていなかった地元（の森）をより身近に感じることでできた」「日本の木を使うことで、このおもちゃで遊ぶ子たちの未来の自然環境が良くなると分かった」「地元産ということでも安心して使える。今後、子どものためのものを選ぶ基準にもなった」。

このように、小さな木のおもちゃがその後の暮らしに大きな影響を与える可能性は十分にあると考えられます。

ます。

赤ちゃんからはじめる生涯木育。この「木育」つながりのキーワードから、自治体と企業、その他にも様々な人たちがこのコンセプトを通してつながり、ウッドスタートで全国各地の地域がより活性化していくことを目指しています。

おもちゃをきっかけに森を守る暮らしへ

子どもの頃から木に親しむ。この小さなきっかけが、やがて日本の森や林業・林産業を活性化させる大きな一歩につながる。赤ちゃんからはじめる木のある暮らしで、このような「よいサイクル」を生み出し、日本人の暮らしを見つめなおすことが私たちの目的です。

市民や消費者に呼び掛け、日本の木を利用するうねりをつくり上げて、日本の山や森に社会的変革を起こすひとつの草の根運動は、まさに、里から山へ、川下から川上に向けてのラブコールです。おもちゃでは、木の消費量からしても大した影響力はないかもしれませんが、しかし、おもちゃがきっかけとなり、暮らしを変えることはできると考えています。

「ファーストトイ」として、日本中に支給された「ウッドスタート宣言」の誕生祝い品数は、現在、約4000個にのぼります。赤ちゃんに新しく届いた木のおもちゃが生み出した笑顔の数は、そのおもちゃの数の2倍、3倍となります。これからも、おもちゃが生み出した笑顔の数を増やしていくよう活動を進めてまいります。

移住者に選ばれる地域になるためには？

―徳島・神山における、好条件を並べない移住対応―

有限会社リビングワールド代表 ● 西村 佳哲

地域活性化センターでは、地方創生の担い手となる人材の養成を目的としたワークショップ「地方創生実践塾」を実施している。9月16日(水)、17日(木)、18日(金)に徳島県神山町で開催された実践塾の内容について、主任講師の西村佳哲氏にご報告いただいた。

(地域支援課)

今回の実践塾の趣旨

地域活性化センターから「移住者に選ばれる地域になるためには？」というテーマを受け取り、この問いをめぐって集まる方々の関心に、真っ正面から応える2泊3日を用意したいと思った。ただし最初に述べておくと、神山町行政にも、地域に住む人々の間にも、「移住者に選ばれる地域になる」という意識はあまりないと思う。それ以前に、貸し物件不足で、移住促進センターのウェイトイング・リストは200人を超しているようだ。

にもかかわらず、寸隙をぬうように面白い人々が移り住んで来ている事実があり、その人々には、共通

して健やかな自立性を感じられる。

研修の後、ある参加者は「結果としてしか起こりえないことを目的化しない」という言葉が心に残っているし、その意味で神山に納得感を得たと語っていた。転入増の目標を設定し、そのための施策を講じて数値が達成されたところで、そこにさしたる喜びはないのではないか。計画が予定通り遂行されただけのこと、かつ来年もまた同じことをつづけなければならぬ。それでは「出会い」の一部始終が、ただの「作業」になってしまう。

フィールドワーク(1日目)

研修は座学中心になりやすい。しかし、せっかく現地にいるのだから、

まちの空気感に触れる時間もとりたい。かといってフィールドワークの時間枠を大人数の団体行動にしてしまうと、一人ひとりの経験の質は下がってしまう。ではどうするか。

参加者を空港と車でピックアップしたバスは、1時間ほどかけて神山のエリアに入り、移住者のピザ屋さんや、カフェ、食堂等の前で停まり、各所で数人ずつを降ろす。こちらが選んだいくつかの店で、少人数に分かれて昼食をいただくところからプログラムに入っていく。

移住後の人々が地域でどのように営んでいるのか、その様子を感じていただいた後、メーン会場の宿泊施設「WE EK 神山」へ。ここは今年7月にオープンしたサテライトワークをメーンに据えた宿泊施設で、「いつもの仕事を、ちがう場所で」というコンセプトを掲げている。「WE EK 神山」に集まった参加者(全34人)は短いオリエンテーションの後、約3人ずつの小グループに分かれ、今度は歩いて約4時間のフィールドワークに出かけた。まちの地図と公共バスの時刻表を片手に。地図には移住者が開店した靴屋、オフィス、お弁当屋、また移住促進センターや、移住者の世話役のような人の家な



フィールドワーク中の参加者

ど、約10カ所がプロットされている。相手先には、もし小グループが訪れたら、可能な範囲で話に付き合ってもらいたいという了解を事前にとっている。4時間後、みなさんはひとまず「なるほど」という表情で戻ってきた。

夕食後、神山のNPO法人グリーンバレー理事長・大南信也さんの話を聞く。この地域における移住増や、生き生きとした展開が、一朝一夕の企画ではなく約20年におよぶ積み重ねの最上段にあることをわかっていただけたと思う。

トークセッション(2日目)

2日目は町内から4人のゲストを招いて、各1・5時間のトークセッ

ションをもった。1年ほど前に移り住んだ3Dモデラーの寺田天志さん。10年少々前にまちにきて、2年前に歯科医院をひらいた手島恭子さん。まちの写真館の娘として生まれ、ご夫婦で3年ほど前に戻った近藤奈央さん。「神山塾」と呼ばれる就労支援事業で、多数の若者の移住のきっかけをつくり出している祁答院弘智さん。

各1・5時間と書いたが、ゲストに持参してもらったプレゼンテーションは20分間。話が一段落したら、3人ほどの小グループを会場側につくり、「いまの話をどう聞いたか？」を語り合う時間を10分ほど持つ。続けて私が公開インタビューを行い、本人自らは語らなかつた部分に光をあて、一段落するとまた別の3人組みで語り合う。そして最後に、ゆつ



お話を聞いて、語り合う参加者

くり質疑応答を交わす時間を30分以上とった。

一方的に聞くのではなく、めいめいが話す機会を持つことで、より自分事に話を近づけることが出来る。同じ話を聞いていても、聞いているポイント人は人によって見事に違う。捉え方も異なるので、小さな語らいを通じてゲストの話はより立体的を増す。

2日目の夜は2年前に移住者がひらいたフレンチ・ビストロで、さらにもう6人の移住者も招いて美味しい食事と歓談の時間を。気さくな町長も参加して、楽しい夜を過ごした。

ワークショップ（3日目）

最終日は、神山町役場総務課の村谷氏と私がまとめ役を担っている、神山における地方創生「まち・ひと・



トークセッションの様子

しごと総合戦略策定」の最新の状況をご紹介します。

人口の獲得という課題に際し、出産世代の優遇や助成制度など、条件面の拡充を考える地域は多いだろう。しかし、ともに生きてゆく相手や勤め先、生きてゆく地域を、条件で選ぶような人は、より条件のよい地域に移り住む。消費者向けの購買促進と同じ構造で移住政策を考えるのは、あまり得策でないと思う。

大事なポイントはサービスの質を上げることにより、バリアフリーにしてゆくことではないか。そのときその地域を選ぶ人たちは、本人自身の感覚と意志と力で動く。なので継続する。

神山は近年メディアで取り上げられる機会が多いが、実際に来てみると、一部に写真スポット化した場所があるものの、全体像はつかみにくい。いったいなぜこのまちに、面白い人たちが集まり始めているのか、よくわからないまま帰る人も多いだろう。しかし、そのわかりにくさが実は神山の力強さでもあることが、この研修を通じて感覚的に共有出来たとしたら、準

備した甲斐があったものだと思う。先の「面白い」人たちとは、誰に言われたわけでもなく何かを始め、しかもとことんやるような生き方や働き方を指している。アーティストも同じく。神山には、移住増を促進する汎用的な方法論があるわけではなく、人のあり方やかわり方の違いがプロセスの質を変え、その帰結として結果が生じているのだと思う。

地方創生実践塾（徳島県神山町）の概要

第1日目 9月16日（水）

フィールドワーク① 移住者が営む飲食店を体験【昼食】

フィールドワーク② 小グループにわかれ、移住者が開店したお店やオフィス、移住促進センターなど見学

お話① NPO 法人グリーンバレー理事長 大南 信也 氏

第2日目 9月17日（木）

町内から4人のゲストを招いてのトークセッション

お話② 寺田 天志 氏（CGクリエイター）

お話③ 手島 恭子 氏（COCO 歯科 院長）

お話④ 近藤 奈央 氏（倉良写真館）

お話⑤ 祁答院 弘智氏（株式会社リレイション代表）

第3日目 9月18日（金）

ワークショップ 主任講師：西村 佳哲 氏

木育から「子どもを真ん中」にのいたまぢづくりへ

—大人の願いが詰まったNew教育—

岐阜県立森林文化アカデミー教授 ● 松井 勲尚

地域活性化センターでは、地方創生の担い手となる人材の養成を目的としたワークショップ「地方創生実践塾」を実施している。10月21日(水)〜23日(金)に岐阜県美濃市で開催された実践塾の内容について、主任講師の松井勲尚氏にご報告いただいた。

(地域支援課)

今回の実践塾の趣旨

「資源」とは何か？地域資源を活かすとはどういうことか？自分自身へ問いかけ続ける11カ月間であった。

昨年11月に市の部署の担当者として6人で始まったミーティングが、開催日までは総勢22人となり、全体会議は11回を数えた。全員が今回の講師という位置付けである。

有識者が発信している地方創生に関する様々なレポートに欠かせないテーマとして「人口減少」がある。それはネガティブな情報として取り扱われるが、果たして鵜呑みにして良いのか？地方が生き残りをかけての人の取り合いなのか？

「違う角度から見れば、楽観的に

とらえることもできる」——これはダライ・ラマ14世の言葉であるが、研修概要説明ではプレゼンの内容に盛り込むことによって、参加者へその疑問を投げかけた。

岐阜県美濃市にある、岐阜県立森林文化アカデミーを会場・拠点として爽やかな秋晴れの中、3日間の実践塾が関東はもとより遠くは隠岐対馬等から31人の受講者が参加して開催された。美濃市は森林率80パーセント。濃尾平野の最北端であり、森林が始まる最南端の位置にある人口約2万2000人のまちだ。美濃市は、子育てに手厚いまちである。しかし、それぞれの団体がばらばらに動いていて、同じ思いで活動しているにもかかわらず、つながっていない

いることが課題であると感じていた。そこで、この実践塾開催を「子どもを真ん中」に置くことで、市民がつながりを感じるためのきっかけと捉え直し、実践塾を行うまでのプロセスを大切に進めることとした。

今回の目玉は、そのプロセスの中から生まれた「放課後ランド」構想である。以前は、学校も家庭も介入しない、子どもだけの遊びの時間が「放課後」という時間ではなかっただろう。しかし、現在はそれぞれの事情や社会の変化により、放課後という時間があまり重要視されていない。放課後には異年齢の子どもたちの社会があったが、今はその交流の場が少ない。途切れてしまった異年齢交流からの学びや、子どもの「やりたい」という思いを具現化することを「放課後ランド」の目的とした。この企画は、美濃市内の子どもの育成に関わる団体の取り組みを一齐に行い、多くの子どもたちに色々な体験、交流をしてもらうものである。賛同者を増やしながらミーティングを重ねていき、実験的に7月に4日間のスケジュールで開催したところである。

さて、ここで実践塾3日間の流れを記す。「すべての時間を美濃市民として気持ちよく過ごす」参加者の皆さんがそんな意識で向かえるよう環境整備に尽力した。

1日目 研修概要説明↓ 基調講演↓14事業プレゼン セッション↓意見交換会①

初日、主任講師の松井が、資源をみる視点の提供を行った。続いて、美濃市「放課後ランド」実行委員会委員の吉田理恵氏と高橋定佑氏が、美濃市のフィールドワークプラン及び美濃市の概要説明を行った。基調講演として「生きる力の強い子を育てる」の著者である天外伺朗氏による講義と密度の濃い質疑応答を行った。「人を変えようと思ったとたんにブレイキがかかるのがコントロール願望。変わることができるのは自分自身である」との話が、まちづくりにも当てはまるのではないかと感じ、心に残った。最後に、美濃の人的資源を共有するため14の事業についてプレゼンテーションを行った。続く意見交換会でも重要な人的資源や文化を知って頂く位置づけとし、美濃の伝統的な「にわか」の実演等、披露してもらった。

2日目 フィールドワーク↓ 放課後ランド体験↓ワーク セッション↓意見交換会②

まずは、実験構想「放課後ランド」について県立森林文化アカデミーの萩原ナバ裕作准教授が報告した。次にフィールドワークとして、市内の自然資源と文化資源を8コースから



「放課後ランド」体験の様子

3日目 グループワーク（企画 書作成）↓発表

選択し体感してもらった。極力自身の足で歩くよう、また、運営スタッフがアテンドしながら交流できるよう、小人数制を取った。午後は「放課後ランド」を疑似体験。目指す姿の空間を体感して頂いた。ここまではインプットの作業である。最後にワールドカフェにてアウトプット。続きは夜のうだつの上がる町並み伝建地区にて、あかりアートも楽しんで頂きながら、「放課後ランド」実行委員会のもてなし企画「ちょい飲みプラン」で交流を深めた。このもてなし企画は、食べ歩き飲み歩きして様々な美濃市内の飲食店を楽しむイベント。実行委員が尽力し、町並み内の飲食店の協力を得て実現した企画である。

地方創生実践塾（岐阜県美濃市）の概要

第1日目 10月21日（水）

プログラム①研修概要説明・課題提起

主任講師：松井 勲尚 氏（岐阜県立森林文化アカデミー教授）

プログラム②基調講演「子ども・教育と地方創生」

特別講師：天外 伺朗 氏

プログラム③「フィールドワーク&放課後ランド」プレゼンテーション

講師：美濃市「放課後ランド」実行委員会

プログラム④意見交換会①

主任講師：松井 勲尚 氏

第2日目 10月22日（木）

プログラム⑤美濃市「放課後ランド」構想説明

講師：萩原 ナバ 裕作 氏（岐阜県立森林文化アカデミー准教授）

プログラム⑥フィールドワーク

講師：美濃市「放課後ランド」実行委員会

プログラム⑦「放課後ランド」体験

講師：美濃市「放課後ランド」実行委員会

プログラム⑧ワークショップ（1）

主任講師：松井 勲尚 氏

講師：美濃市「放課後ランド」実行委員会

プログラム⑨意見交換会②

第3日目 10月23日（金）

プログラム⑩ワークショップ（2）・まとめ

主任講師：松井 勲尚 氏

講師：美濃市「放課後ランド」実行委員会

講師紹介

美濃市「放課後ランド」実行委員会

実行委員長 雲山 晃成 氏

【みのプレーパークの会】【野外自主保育「森のだんごむし」】萩原 ナバ 裕作 氏

【みの木育寺子屋】【MOTTAINAI工房】松井 勲尚 氏

【美濃・禅のつどい】雲山 晃成 氏 高橋 定佑 氏 荒田 章観 氏

【NPO法人四つ葉のコウゾ】高橋 貴子 氏 古田 真由美 氏 下村 理恵子 氏

【夢かなうまち☆うだつカーニバルアウトリーチ企画】古田 大地 氏

【岐阜県立武義高等学校書道部】古田 七江 氏

【子育て支援もみじっこ】鈴木 美智子 氏 吉田 理恵 氏

【NPO法人グリーンウッドワーク協会】小野 敦 氏

【NPO法人グリーンウッドワーク協会・竹部会】鬼頭 伸一 氏

【清流長良川リバーダイビングリゾートダイビングスクールTEAMAIR】深和 英生 氏

【美濃市民間保育園】野倉 照子 氏（下牧保育園）佐藤 よしみ 氏（牧谷保育園）

雲山 晃成 氏（美濃保育園）

最終日は、美濃の資源を活かす企画を立ち上げるという想定でいくつかのテーマをピックアップし、その企画を「したい」人を募り、グループワークを行った。チームごとに発表を目指し、やりたい企画を協力して具体化する時間であった。

ワーク中「美濃市の宝は…」という声があちこちから聴かれ、美濃のために、という思いで真剣に考える時間となり、とてもワクワクする企画が上がった。参加者の皆さんが、本当に美濃市民になったつもりで、この町を良くするためのプランを真

剣に考えて下さったことに、心から感謝したい。

資源とは人の視点

すべての事物に対する見方、考え方を捉え直し、「中庸」を見据えた多角的な視点で再編集する提案からスタートした実践塾であった。また「資源とは人の視点」であること、それを「見える化」するためにはスキルが必要であることを共有した。「岐阜県美濃市では大変お世話になりました。：本当に感謝の二文字しか思い浮かびません。ありがとうございます

ございました。楽しすぎて美濃のファンになりました」。

今思うことは、小さくても人口が少なくても、「優しさや思いやりに包まれた空間」こそが地方創生につながる。ファンになり、結果として、住みたいまちになる。送られて来た参加者のメールを読み、そんなことを思った。

改めて、すべての大人が経験した「子ども」を真ん中に置き、明日につなげたいと思う。

島根県松江市で地方創生フォーラム

—「教育・移住をキーワードとした
新たな地方創生」をテーマに—

地域活性化センターでは、毎年地域活性化の今日的な課題をテーマにフォーラムを開催してきた。今年度は地方創生フォーラムとして福島県、島根県、東京都の3会場で開催。地方創生フォーラムin島根はその第2弾として10月16日に島根県松江市にある松江テルサで、「教育・移住をキーワードとした新たな地方創生」をテーマに、開催された。島根県をはじめ、北は北海道、南は鹿児島まで、およそ230人が集まった。冒頭、島根県の溝口善兵衛知事(丸山達也政策企画局長代読)、当センターの椎川忍理事長による主催者挨拶があり、その後、「くにびきプレゼンテーション」「くにうみパネルセッション」が行われた。

《くにびきプレゼンテーション》

「人づくり×地域づくり」の最先端

第1部は、教育移住・教育による

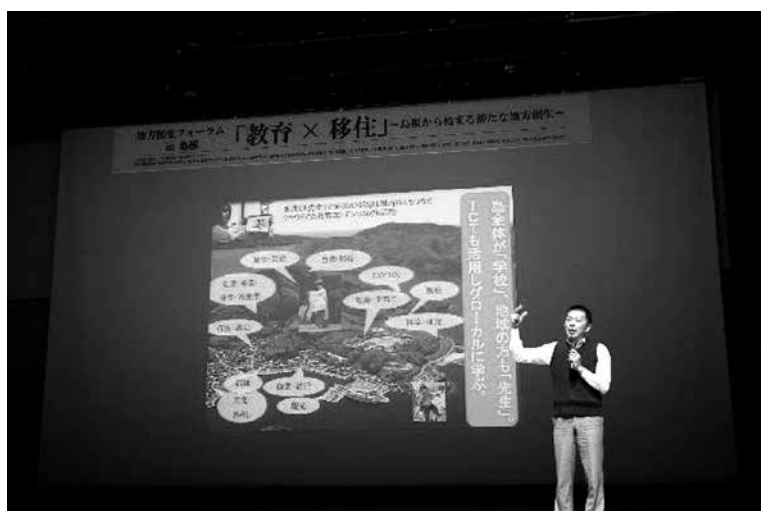
人づくりに日頃から取り組まれている有識者3人によるプレゼンテーションが行われた。

1人目のプレゼンターはNPO法人智頭町森のようちえんまるたんぼ理事長の西村早栄子氏。自身が子育ての場所として智頭町に移住した経緯を話し、実体験を踏まえた鳥取県での子育てについて語った。また、自ら開園した「森のようちえん」の特徴として、1年を通じ森で過ごす(園舎がない)、子どもたちの主体的・自主的な行動を尊重するという、見守る保育であると説明。森のようちえんでは、子どもたちが協力して主体的に行動することによって、連帯感や仲間意識、社会性が育まれるとの見解を示した。

2人目は隠岐國学習センター長の豊田庄吾氏。教育をすればするほど若者が地域から出て行ってしまう「教育のジレンマ」について、過疎・

人口減少などに対して教育に何ができるか、ということとを海士町の島前高校での実践例をあげて話した。存続が危ぶまれた島前高校において、「島」という環境をいい意味でクロージした空間と考え、島全体を学校として捉える、また離島という僻地をこれから日本が直面する過疎・少子化問題の「最先端」と捉え、それらの問題について学ぶという、海士町ならではの取り組みを説明。今では「島留学」によって外部から多数の生徒を受け入れていることが報告された。

3人目はNPO法人ETIC代表理事の宮城治男氏。宮城氏は、教育とは人が豊かに楽しく生きていく、またよりよい社会を作るためのものであるとした上で、現在の教育がこれからの世代を育てるのに適しているかを考えた際、前例を踏襲するような現在の教育は適していないと語った。今ある仕事の65%は15年先になくなっていくという変化の時代において、地域で新たに仕事をつくる次世代のリーダー・企業家を育てる必要性を説明。新たなことに



くにびきプレゼンテーションの様子

チャレンジし、改革をしていく人づくりの教育がこれからの時代に必要であると語り、そのような人が育つ場所は都心部でない「地域」が適していること、つまりまちは人を育てるキャンパスであると述べた。

《くにうみパネルセッション》

「教育×地方創生」の課題と未来

第2部は、「いかに教育移住や仕事をつくる人づくりを具現化していくか？」をサブタイトルに、仮説を基に議論を交わすパネルディスカッ



くにうみパネルセッションの様子



会場の様子

ションが行われた。仮説提言者として島根県教育魅力化特命官である岩本悠氏、コーディネーターとしてNHK松江放送局アナウンス副部長である伊奈正高氏、パネリストとして東京大学大学院教育学研究科教授の牧野篤氏、そしてくにうみプレゼンテーションで登壇された西村早栄子氏、豊田庄吾氏、宮城治男氏の計6人で行われた。

まず仮説提言者の岩本氏より、教育移住について、二つの提言がなされた。

れた。一つ目は「地域の未来を拓くグローバルな若者の育成」の必要性、二つ目は「魅力的な教育環境で新たな人の流れを作る」可能性。

次に牧野氏の自己紹介を兼ねたプレゼンが行われた。牧野氏は、生涯学習は人を結び付けていきながら住民自身が地方を形成する力をつけていく（経営していく）教育であると述べた。これまでは学校教育と生涯教育は相いれない分野であったが、国においても、地域に根差した学校

のカリキュラムを作成する流れがあり、これからは学校単体で教育を行っていくのではなく、地域住民が地域を運営しながら子どもを受け入れていく必要があると語った。

牧野氏のプレゼン後、伊奈氏より各登壇者に質問がなされた。幼稚園の現場にいて地方創生について何か思うことがあるかという質問に対し西村氏は、人口を増やす政策のために助成をしたり移住を促したりするのではなく、都会の人に田舎では

満足した育児がで

きると伝えることで自然と様々な地域で活動が広がっていくのではないかと答えた。一つの目の提言であるグローバルな若者の育成について、豊田氏は①郷土愛を育む②地域課題と対峙させる③たくさんの人と関わる、ことに、地域への「母性」または「マインド」を育てることが必要であると説明した。次に岩本氏か

ら宮城氏に対し、地域コーディネーターの資質、事業に成功・失敗する若者の特徴についての質問があり、宮城氏はコーディネーターと若者の関係性は非常に大切であり、短期的な目で見れば事業に失敗しているようでも、5年、10年と醸成すれば成功する可能性、また地域、職を変えて活躍するケースもある。それはそれで成功であると言えるので、若者を見届ける、また導けるコーディネーターの存在が重要であると語った。

その後、参加者に配られた「発問カード」を回収し、生涯教育と地方創生について、なぜ県外のコーディネーターが成功するのか、という二点の質問に対して、登壇者で議論した。

最後に、本フォーラムの中でキーワードとして挙げられた「コーディネーターの重要性」について、牧野氏は地域の自尊心を尊重しつつ、寄り添うようなコーディネーターによって、教育が様々な横の広がりを持たせることが大切なのは、と話し、岩本氏は質の高いコーディネーターを今後どう教育していくか、という課題をあげて、当フォーラムを締めくくった。

地域づくり情報課 ● 三ツ井卓也

田舎暮らしを地域で応援！

「ど根性ガエル」で「カエル」帰る」をPR



山梨市まちづくり政策課

● 原田 亘

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。地域活性化センターでは、「移住・交流による地域活性化支援事業」として、地域団体もしくは市町村等が自主的・主体的に実施する、都市住民などを受け入れる事業を支援している。

今回、平成26年度に同事業を活用した山梨県山梨市の取り組みを山梨市まちづくり政策課の原田亘氏にご紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

都心から近すぎず、遠すぎず、程よい距離感

平成17年3月、山梨市、牧丘町、三富村が合併し、新「山梨市」が誕生しました。今年10月17日には新市誕生10周年を記念した「市制祭」を開催し、市民と観光大使が協働して制作した「市民歌」の発表を行い、会場の皆様と今後の山梨市の発展を祈念したところです。

その山梨市は、面積の約8割を森林が占め、笛吹川とその支流などが

もたらす肥沃な土地の恩恵を受けた、などらかな斜面や平坦地に広がる桃・ぶどうの果樹園は、美しい景観をおりなすとともに、県内有数の生産量を誇っています。「西沢渓谷」「笛吹川フルーツ公園」など、観光資源も大変豊富な地域です。

また、甲府盆地の東部に位置し、北部は埼玉県秩父市及び長野県川上村にそれぞれ接する緑豊かな場所であるとともに、都心から約100キロ圏内にあり、JR中央本線、中央自動車道で90分という交通の利便性にも

恵まれています。総合病院や産婦人科医院など医療機関も充実しています。

移住希望者のサポート機関を設立

山梨市では、空き家を活用した移住促進事業「空き家バンク」にいち早く取り組み、今年で丸9年を迎えました。これまでに多くの方々にご利用いただき、移住者の中には、交通の利便性を活かし東京と山梨を行ったり来たりという二地域居住を楽しんでいる方も多くいらっしゃいます。

そんな中で、もう一歩踏み込んだ移住希望者への支援として、田舎暮らしの不安や疑問点などについて、気軽に相談に乗れるサポート機関「山梨市田舎暮らし応援団」(以下「応援団」)が平成26年に設立されました。応援団は、漫画「ど根性ガエル」の作者である山梨市出身の吉沢やすみ先生を団長に、行政、宅地建物取

引業協会、諸団体と連携して、田舎暮らし体験ツアーをはじめ、移住交流会や市内での魅力発信事業などを実施する団体です。事務局は、市内で定住促進などまちづくりの推進を積極的に行い、平成24年度第3回地域再生大賞優秀賞を受賞したNPO法人山梨ガバメント協会に担っていただいています。

シンポジウムや
移住体験ツアーを開催

応援団は、平成26年9月の「ふるさと回帰フェア2014」において、「山梨の魅力語る」と題してシンポジウムを開催しました。約100人の来場者があり、そのアンケート結果では、40代の割合が最も高く、仕事をしながら田舎暮らしをしたいという、働き世代の方々に関心が高いことが伺えました。

このシンポジウムでは、コーディネ



ふるさと回帰フェアで行ったシンポジウムの様子



田舎暮らし応援ツアーで先輩移住者を訪れた時の様子



JOIN移住・交流&地域おこしフェアでの相談ブースの様子



応援団のTシャツと団員カード



団員カードのアップ

ネーターやパネリストの考察などを通じて、山梨県内の動向及び山梨市の取り組みを、田舎暮らしを希望する方や来場者に情報発信できたことは大変有意義であり、こうした全国ベースのイベントに参加し、独自の情報発信ができたことは効果的であったと考えます。

10月、11月には、応援団員である田舎暮らし実践者と移住希望者との交流会・体験ツアーを実施しました。実際に田舎暮らしをしている方のお宅を訪ね、環境や周囲の状況及び課題にまつわる実践談を聞くことで、より具体的な情報を収集していただいたと実感しています。

応援団のメンバーや行政担当者からも実際の地域の様子や風習などをツアー参加者に伝えることができたので、参加者の満足度も高かったものと思われまます。

平成27年1月には「JOIN移住・

交流&地域おこしフェア」にも出展し、山梨市への移住促進PRと田舎暮らし相談を行いました。田舎暮らし実践者の生の声を伝え、行政担当者から市の制度を丁寧に説明するという役割分担の重要性を改めて感じる機会となりました。

「ど根性ガエル」で田舎に力エル？

応援団の事業として開催したシンポジウムやツアーでは、お揃いのPR用Tシャツを団員（スタッフ）が着て皆様をお迎えしました。「ど根性ガエル」に登場する「ピョン吉」を前面に押し出し、「カエル」帰る」というイメージを発信し、移住相談も和やかな雰囲気で行うことができました。

また、応援団に入っていたいた移住者の方々には、「団員カード」をお配りして、移住希望者を応援する気持ちを共有し、相談対応や山梨

市のPRにご協力いただくことをお願いしました。

更に、今年に入ってから追い風が吹き、実写版の連続ドラマ「ど根性ガエル」が日本テレビ系列で放送されました。これをきっかけに山梨青年会議所、市商工会青年部、市観光協会が発起団体となり、市も協力して「山梨市ど根性ガエル活用プロジェクトチーム」（通称「ど根性ガエルの会」）が結成されました。

応援団もど根性ガエルの会も、今後の市の活性化のため、ますます活躍が期待されるところです。市の職員も名刺や缶バッジに「ど根性ガエル」を取り入れてPRに努めています。

今後の展望

今回の移住・交流促進事業を通じて、首都圏を中心に全国に情報発信できたことは、非常に効果的なものだったと捉えています。

ツアー参加者や移住相談者の声を聞くと、まったく知らない土地で物件を購入することはハードルが高い

ため、賃貸物件を希望する方が大変多くなっています。そのため、今後はそういった要望にも応えていけるよう、いかに賃貸物件を増やしていけるかを検討するとともに、応援団の取り組みの中で物件掘り起こしを呼びかけていく必要性を感じました。

NPO法人ふるさと回帰支援センターが運営する「ふるさと暮らし情報センター」の来場者を対象とした2014年のアンケート調査結果では、ふるさと暮らしを希望する地域として山梨県が見事1位となりました。山梨市への移住のお問い合わせも多くいただいている状況です。

しかし、今後、全国各地で移住・交流の取り組みが進んでいくと、移住希望者への呼びかけはますます激化していくことが予想されます。

そのような状況の中で、様々な人たちが関わり合い、移住を推進していることを広く知っていただくこと、そして、地域で移住者を受け入れる理解を深めることが、人の流れを生み、地域活性化の基礎づくりにつながっていくと考えています。

地域と行政が連携して移住者の受け入れを進め、移住希望者の方々にとって、安心して確実な情報を提供し、移住の決断を下すことにつながられるよう、今後も頑張つてまいります。

「根性、根性、ど根性！」（アニメ「ど根性ガエル」主題歌より）

「学生さん、一緒に祭りすっぞお！」

―担い手不足の民俗行事、助っ人の若者とともに保存・継承―

日本海に大きく突き出た能登半島の、ちょうど真ん中。石川県七尾市中島町小牧（おまき）地区は、海あり、山ありの豊かな自然に恵まれた農山漁村だ。世界農業遺産「能登の里山里海」の認定地域でもある。かつて半農半漁の生活を営んでいたこの地では、豊作豊漁を感謝する「お熊甲祭（くまかぶとまつり）」（国指

定重要無形民俗文化財）や、豊作を願う「虫送り」といった民俗行事が行われてきた。こうした民俗行事は現在まで脈々と受け継がれてきたものの、過疎化や少子高齢化により、長年、担い手不足という問題を抱えていた。

こうした状況を打破しようと、学生などの若者を集落に呼び込んで、民俗行事の保存・継承に取り組んでいるのが、集落の壮年団である「小牧壮年団」だ。今回は、学生など外部の人材を、民俗行事の担い手・助っ人として集落で受け入れる取り組みについて、小牧壮年団事務局の加賀淳一氏にお話を伺った。

★団体プロフィール★

設立年＝平成14年（地域づくり活動開始年）
設立・運営主体＝小牧地区の青壮年層の住民
代表者＝団長 岩浜 善之
（任期は1月1日～12月31日）
構成員＝22名（平成27年10月1日現在）
〈連絡先〉
〒929-2214
石川県七尾市中島町小牧 小牧会館内
電話：090-3384-9849（事務局 加賀氏携帯）
（E-mail）omaki@mopera.net
（URL）http://blogs.yahoo.co.jp/omaki_so/

民俗行事への参加と世話を担う

小牧壮年団は、小牧地区の青壮年層の住民を中心とする集まりで

ある。小牧地区のある七尾市中島町の壮年団は、長男だけではなく次男以下全員が入団する「青壮年型若者組」であり、これは典型的な「祭り型若者組」と言われている。小牧壮年団の役員は団長、副団長、事務局、班長で構成され、現在は20～40歳代の団員22人が活動している。

小牧壮年団の歴史は古く、活動は明治・大正頃から始まっている。民俗行事への参加と世話を担うのが主な役割だが、平成14年からは学生と協働で地域課題の解決を目指す「域学連携」にも取り組むなど、精力的に活動の幅を広げている。

地域の誇り「お熊甲祭」の担い手不足

「小牧にも人口減少の波が押し寄せている。出身者は帰ってこないし、年齢でリタイアする人もいる。移住者は減多にいない。このままでは、



小牧壮年団&あぐり&足湯隊、前列右端が小牧壮年団事務局・加賀淳一氏

集落で守り続けてきた祭りに参加できなくなるのでは」。祭りの担い手不足で危機的状況にある集落。ふるさとを何とかしなければという危機感と、地域の誇りである「お熊甲祭」への強い思いが発端となり、小牧壮年団は祭りを保存・継承するための取り組みに乗り出した。

まずは近場から担い手を集めようと、これまで参加する慣習のなかった集落内の女子小中学生に焦点を当て、太鼓打ちやお道具持ちとして祭りに参加できるよう取り組んだ。次に、杵旗の担ぎ手となる青年・壮年層の男手の減少を見越して、祭りで担ぐ杵旗の小型化を図った。これに

より、40人ほどの担ぎ手が必要だった。幟旗は25人ほどで担げるものになったという。こうした地道な取り組みにより、一時的には担い手不足が解消されることとなったが、「数年前は更に担い手が減少する、何か根本的な解決を図らないといけない」と感じていた加賀氏は、新たな力・人材を確保する方法を模索していたという。

転機、学生たちとの出会い

「何かいい方法はないか」と考えていた矢先、平成20年に偶然、大学コンソーシアム石川の「地域貢献型学生プロジェクト事業」を見つけた



お熊甲祭で担ぐ幟旗は高さ約20m。迫力満点だ



祭りの準備に熱が入る学生たち



学生たちは能登の里山里海資源を体感できる

るようになったという。

祭りに参加する際の費用(交通費、宿泊費等)は、基本的に学生などの若者自身が負担している。小牧壮年団としては、学生たちが祭りに参加するためのサポートを行うだけではなく、七尾湾での釣り体験など、能登地域を体感してもらうことにも力を入れていく。また、学生たちには祭りの準備段階から参加してもらい、祭りの歴史文化を理解してもらったうえで本番に参加してもらっている。加賀氏は「接待はしないし、お客さん扱いもしない。一緒に祭りを作るタッグパートナーだと思って接している」と話すが、こうした親しみやすい対応や、丁寧にコミュニケーションを図っていく姿勢が、参加した学生たちを満足させ、「卒業しても、また参加したい」というリピーターになることにもつながっているものと思われる。

これまで8年にわたって続いてきた受け入れの取り組みは、近隣集落にも影響を与えてお

り、「外部人材との連携で祭りの担い手を確保する」というスタイルは小牧以外にも少しずつ広がりを見せているという。集落それぞれで、外部人材との連携に対する考え方は違うそうだが、小牧壮年団の取り組みは、民俗行事を存続・継承していくための一つの方法として、確実な実績を残している。

加賀氏は「来てくれる学生たちを本当に尊敬している。大学を卒業しても、祭りに参加するために小牧まで来てくれる若者も多い。我々にとっては、リピーターという言葉の枠を超えた存在だ。本当にありがたい」と話す。

「今ある縁を大切に」

最後に、今後の展望についてお話を伺った。「今の縁を深めることが一番大事。あぐりや足湯隊とのコミュニケーションは昔よりも取れてきているので、関係をさらに深めていきたい。集落を残していくために、小牧壮年団は祭り以外にも、集落のありとあらゆる問題に関わっていく」と語る加賀氏の言葉に、これまで築いてきた学生たちとの関係への自信と、これからもふるさとを盛り上げていくという強い思いを感じた。

実寸大かつおのハガキで焼津をPR ―シティセールの一環、大きな反響―

焼津市政企画課 主査 ● 新村 淳

規格外のPR！

焼津市では8月10日から市内への転入者と市内転居者を対象に、実寸大かつおハガキの配布を始めました。焼津市がかつおの水揚げ量が全国一であることから、かつおを使っ



全長 55 センチの実物大かつおハガキ



かつおハガキを受け取る市民

た市外へのシティセールの一環です。作成したのは、全長55センチのかつおの形をしたハガキで、かつおの写真が実寸サイズでプリントされています。裏面には、焼津の魅力を伝え

る写真などが印刷されており、ハガキを受け取った人が焼津に興味を持ってもらえるものになっています。定型外郵便物の大きさに収まっていることから、120円の切手を張れば日本全国どこにでも発送することが出来ます。

アイディアは若手職員から！

このかつおハガキは、焼津市の若手職員9人で構成する「シティセールスプロジェクトチーム」が作成

しました。普段別々の職場で仕事をしている若手職員が仕事の合間に定期的に集まり、市をPRする取り組みについて協議を重ねまし

た。様々なアイディアが出る中で水産業が盛んな焼津を代表する魚であるかつおを「日本全国にPRしよう！―と、かつお型のポストカードを作成することに。「ハガキを受け取った人の自宅の郵便受けから尻尾が飛び出すことになり、インパクトがあつて面白いから、実寸大の大きさにしよう！―というアイディアから、焼津の魅力をダイレクトに伝える実寸大かつおハガキが誕生しました。

市内外からの大きな反響

8月10日からの配布にあたり、県内外の報道機関で取り上げていただいたことから、多くの市民や県外の方から「私も欲しい。販売は行わないのか？」という問い合わせが殺到。元々販売は想定していませんでしたが、反響の大きさから、急遽、10月7日より焼津市観光協会での販売を

開始しました。全国にゆるキャラをデザインしたポストカードは数多くありますが、あえて市の魅力をそのまま伝えるポストカードにしたことで、多くの人に強いインパクトを与える事が出来たと思います。

事業を通じて 若手職員がスキルアップ！

新たなことを始める時には、周囲から不安や反対の声が投げかけられることがあります。今回のかつおハガキの作成については職員からの反対の声はなく、プロジェクトチーム内でも「面白いからやってみよう」と全員大賛成でした。若手職員を中心としたプロジェクトチームのびのびと企画することが出来、若手のアイディアをダイレクトに事業化することが出来たことは大変良かったと思います。また、若手職員がこの取り組みを企画から実行まで行ったことにより、職員の調整能力向上などスキルアップにつながったと思います。

最後に、このハガキは市外の方を対象としたシティセールの一環として作成しましたが、それだけでなく焼津に興味を持ち、焼津のことを好きになってくれる方が増えるきっかけになってくれればと思います。



春日井市長 ● 伊藤 太

環境と人にやさしいまち、春日井市

豊かな自然に恵まれた春日井市は、名古屋市の北側に接し、国指定史跡である二子山古墳や国指定重要文化財の密蔵院多宝塔など、史跡や歴史的建造物が数多く残されているまちです。

その一方で、JR中央本線や名鉄小牧線を始め、東名高速道路、中央自動車道、名古屋第二環状自動車道、国道19号線などの幹線道路網や、隣接する県営名古屋空港へのアクセスの良さから、広域交通の結節点となっています。

これら利便性の高い交通ネットワークの優位性を活かし、優良企業の誘致を積極的に進めようと、「企業誘致」「事業者支援」「地域活性」の3つを柱とする「産業振興アクションプラン」を昨年3月に全面改定しました。工場や物流施設の新設・増設や設備投資、さらには研究開発や人材育成に対する支援など、国内トップクラスの支援メニューにより、魅力ある事業環境で市内外から選ばれるまちの実現に向け、施策を展開しています。

また、本市には地域ブランドといえるものはいくつかありますので、代表的なものをご紹介します。

一つめは「書のまち春日井」です。本市は平安時代の書家のひとり、小野道風（おののとうふう）が生まれた地であると伝えられており、昭和24年から始まった全国公募の書道展である道風展の開催のほか、道風記念館では平安時代から現代までの書作品約2600点を収蔵・展示しています。また、特色ある教育の取り組みとして、小学校20校で書道科を実施し、書道文化の振興に力を入れています。

二つめは「剣道のまち春日井」です。剣道の甲子園とも呼ばれる「全国高等学校剣道選抜大会」を開催。今年度で第25回となるこの大会は、第1回から本市で開催しています。書道と剣道は、「文化・スポーツ都市」の実現を目指す本市にとっての両輪といえるものであり、まさに「文武両道」であります。

三つめは「サボテンのまち春日井」です。伊勢湾台風

で大きな被害を受けた農家が、当時副業で栽培していたサボテンの本格的生産を始め、他の地域では真似のできない、種から苗を育てる実生栽培の技術などによって、2～3年もののサボテン苗の生産体制を確立しました。やがて全国各地へと出荷する一大生産地となり、現在では食用サボテンの栽培にも力を入れ、サボテンを使った料理やお菓子なども数多く開発されています。

春日井ブランド以外にも本市をアピールするものがたくさんあります。まずは「春日井広報大使」です。市に縁があり、芸術、文化、スポーツ、教育等の分野で活躍している13人の大使は、各方面で春日井の魅力を市内外に広くPRし、イメージの向上に貢献してくださっています。

もうひとつは、昨年11月に交付が始まった自動車の春日井ナンバーです。日を増すごとにその台数は増加しており、「春日井」の名を全国あちこちで皆様に見かけていただいているものと思います。現在は、国が2年後の導入を検討している「ご当地図柄入りナンバープレート」に注目し、より一層「春日井市らしさ」を表現した春日井ナンバーの実現を目指しています。

さて、昭和18年6月1日に市制を施行した際には5万4000人程だった本市の人口は、72周年を迎えた現在では31万1000人を超え、今もなお僅かずつながら増加を続けています。

これからは、自然を大切にするとともに、子育てがしやすく、子どもたちが元気に勉強や運動に励み、高齢者の方々に豊かな知識や経験を生かしていただく社会が、より求められる時代になります。

「子はいかに、子育ては春日井」を合言葉に、誰もが心豊かに、誇りを持ち、住み続けたいと思える「環境と人にやさしいまち」の実現に向け、全市をあげて取り組んでおります。

都市機能と自然が調和し、歴史と文化を育むまち春日井へ、ぜひ一度お越しください。

にいがた

あなたの暮らしが物語になるまち、

海、山、川、たくさんの恵みがあるまち、にいがた。
春、夏、秋、冬、四季折々の表情があるまち、にいがた。
数々の災害を力をあわせて乗り越えてきたまち、にいがた。
たくさんの魅力にあふれているにいがたは、あなたの
暮らしを物語に変えてくれます。



(左)「移住女子」坂下可奈子さん / (右)「十日町市池谷集落」曾根 藤一郎さん

表参道・新潟館ネスパス 2 階

<http://www.furusato-niigata.com/>

にいがた暮らし

検索



にいがた暮らし相談窓口

T E L: 03-3479-1415

E-mail: n-soudan@nico.or.jp

にいがたUターン情報センター

T E L: 03-5771-7713

E-mail: info@niigata-uturn.jp

表参道駅A2出口から徒歩1分



〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 4-11-7

菊池市は、熊本県北東部に位置する人口5万人の市です。

北部の八方ヶ岳から東部の阿蘇外輪山の鞍岳まで山岳が連なる山林に囲まれた地域で、菊池川により形成された菊池平野を中心に肥沃な土地を形成しています。

豊かな自然を生かした農林業を基幹産業としており、県内一の生産量を誇るシイタケをはじめ「七城メロン」「旭志牛」などはそれぞれブランド化され、県内外へ出荷されています。また、菊池米の七城のこめは食味ランキングで7年連続特Aを獲得するほどです。

毎年約30万人が訪れ西の奥入瀬とも称せられる「菊池渓谷」や日本の名湯百選に認定された「菊池温泉」を擁し、各地に桜、コスモス、ホタルなどの四季を彩る自然に囲まれた菊池市はまさに「癒しの里」。大宰府官の流れをくむ名族、菊池氏の歴史と伝統を物語る観光スポットやレジャー施設も有しており、県内外から多くの観光客を集めています。この魅力を肌で感じてみませんか。



■菊池渓谷 九州随一の景勝地といわれ、訪れる人を圧倒させる四季折々の美しさを存分に堪能できるスポットが点在



■秋の風物詩コスモス 約150万本のコスモスがピンクの帯となり、菊池川と迫間川の河川敷約3〜4kmにわたり出現する



■ホタルの生息地 清らかな水と美しい自然が残る日本でも有数のホタルの里。毎年数万匹のゲンジボタルが乱舞をみせる



■花火大会 毎年8月14日に泗水孔子公園で打上げられる観客を魅了させる夜空に彩る1.5尺の大火花



■鞍岳 山容が馬の鞍に似ていることから「鞍岳」の名が付いたと言われ、全国遊歩百選に選ばれている



■菊池神社 明治3年(1870)に皇室に忠義を尽くした菊池一族を称え明治天皇の命により創建された



■菊池の福井 菊池の腕利き料理人が、地元産の米や肉を使って開発した「菊池の福井」。是非ご賞味下さい

平成 27 年度 地方成功人材のマッチングによる 土日集中セミナーのお知らせ

通信
センター

「やねだん 東京塾」

鹿児島県鹿屋市柳谷集落、通称「やねだん」は人口 300 人ほど、電車やバスなどの公共交通機関も通らないどこにでもあるような農村集落です。他と異なるのは、補助金をもらわずに地域にあるものを活かすことで自立と再生の道を歩んでいることです。そこには「集落に補欠なし」「感謝が感動を生み、行動につながる」の基本からなる、行政に頼らない地域おこしがあります。

この取り組みを学ぶべく、やねだんでは「故郷創世塾」を含め多数の研修・視察が行われています。「故郷創世塾」講師陣及び卒塾生による集中講義を通して、やねだんの成功の本質について学びましょう。

【定員】 60 名

【講師】 豊重 哲郎 氏（やねだん代表、柳谷自治公民館長、やねだん故郷創世塾塾長）
木村 俊昭 氏（東京農業大学教授、コミュニティ総合プロデューサー、やねだん故郷創世塾常任講師）
椎川 忍（地域活性化センター理事長、やねだん故郷創世塾常任講師）ほか

【開催日程】 1 月 23 日（土）13:00～18:40、24 日（日）9:00～13:00（予定）

「高野誠鮮氏と木村秋則氏から学ぶ “くさらない地域づくり” ～世界に売れる地域ブランド Japonic（自然栽培農産品）の挑戦～」

限界集落である石川県羽咋市神子原地区を立て直すため、神子原米をローマ法王へと献上することでブランド化を図った高野誠鮮氏。

無農薬・無肥料の自然栽培により、“奇跡のリンゴ” と呼ばれる腐らないリンゴを作った木村秋則氏。

このお二人が自然栽培を通じて繋がったことにより、世界に通用する日本の自然栽培農作物のブランド化へと、挑戦を続けられています。

長年の取り組みの中で人々を突き動かしてきたお二人の思考力・実践力や、地域ブランド確立の手法について学びます。

【定員】 60 名

【講師】 高野 誠鮮 氏（石川県羽咋市教育委員会文化財室長、日蓮宗本證山妙法寺第 41 世住職）
木村 秋則 氏（株式会社木村興農社代表・The Natural Farming AK method 代表）

【開催日程】 2 月 6 日（土）13:00～18:10、7 日（日）9:00～13:00（予定）

共 通

【対象者】 地域活性化に熱意のある方、地域のことを勉強したい方など

【参加費】 一般 25,000 円、大学生 10,000 円

※ 3 回券（60,000 円）、6 回券（90,000 円）あり〔複数回、複数人での使用も可〕

※ 今年度の土日集中セミナー開催もあと 3 回。回数券を使用するラストチャンスです。

【会場】 東京八重洲ホール（東京都中央区日本橋 3-4-13）

【申込方法】 FAX(03-5202-0755)、E-mail (creative@jcrd.jp)

または、ホームページの申込フォーム

【問合せ先】 クリエイティブ事業室 (TEL: 03-5202-6134)

※ 詳しくはホームページをご覧ください。 <http://www.jcrd.jp/>

平成 27 年度第 2 回 地域づくりコーディネーター研修会のご案内

自主的、主体的な地域づくりのための活動を行う民間団体の全国組織である地域づくり団体全国協議会より、「平成 27 年度第 2 回地域づくりコーディネーター研修会」の案内がありましたので、ご紹介いたします。

参加ご希望の方は、下記の地域づくり団体全国協議会事務局へお問い合わせ下さい。

平成 27 年度第 2 回地域づくりコーディネーター研修会（東京）概要

「『大切なわがまちを守りたい!』～地元を愛する人たちの未来への挑戦～」をテーマに、時代とともに活気が失われつつある大切な「わがまち」を次世代に残すために活動している実践家を招き、参加者とともに「わがまち」の未来に向けて議論を深めていきます。多くの方のご参加をお待ちしております。

【日 程】平成 28 年 2 月 12 日（金）13 時～17 時 30 分（18 時より交流会あり）

【場 所】東京八重洲ホール 201 会議室（東京都中央区日本橋 3-4-13 新第一ビル）

【内 容】実践家による事例発表、パネルディスカッション、交流会

【登壇者】岡崎 昌之氏（地域づくり団体全国協議会 会長）

椎名 喜予氏（NPO 法人江戸優り佐原まちづくりフォーラム）

小松 圭子氏（有限会社はたやま夢楽）

飯干 淳志氏（高千穂ムラたび活性化協議会）

【対 象】地域活性化に熱意をお持ちの方

【定 員】40 名（但し、定員になり次第、締め切らせていただきます。）

* 申し込み方法など詳しくは一般財団法人地域活性化センターのホームページ中、「地域づくり団体のひろば」をご覧ください。

【問合せ先】地域づくり団体全国協議会事務局（地域活性化センター研修交流課内）

TEL 03-5202-6135

登壇者



岡崎 昌之氏（おかざき まさゆき）
法政大学名誉教授
地域づくり団体全国協議会 会長



小松 圭子氏（こまつ けいこ）
有限会社はたやま夢楽



椎名 喜予氏（しいな きよ）
NPO 法人江戸優り佐原まちづくり
フォーラム 事務局長



飯干 淳志氏（いいほし あつし）
高千穂ムラたび活性化協議会

地域づくり 12 月号

2015 年 12 月 1 日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋 2-3-4 日本橋ブラザビル 13 階 電話 03-5202-6131（代）<http://www.jcrd.jp/> 印刷・製本／株式会社太平印刷社

法律で許可された場合以外に本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課（03-5202-6138）まで、ご連絡下さい。



宝くじは、 みなさまの 豊かな暮らしに 役立っています。

宝くじは、図書館や動物園、学校や公園の
整備をはじめ、少子高齢化対策や災害に
強い街づくりまで、さまざまな
かたちで、みなさまの
暮らしに役立っています。

一般財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。



一般財団法人

日本宝くじ協会

ホームページ

<http://jla-takarakuji.or.jp/>

